

やるべきとはやた。  
やりたことなら  
いっぱいある。そんな  
自由を後押しする  
シンケンの家づくり。

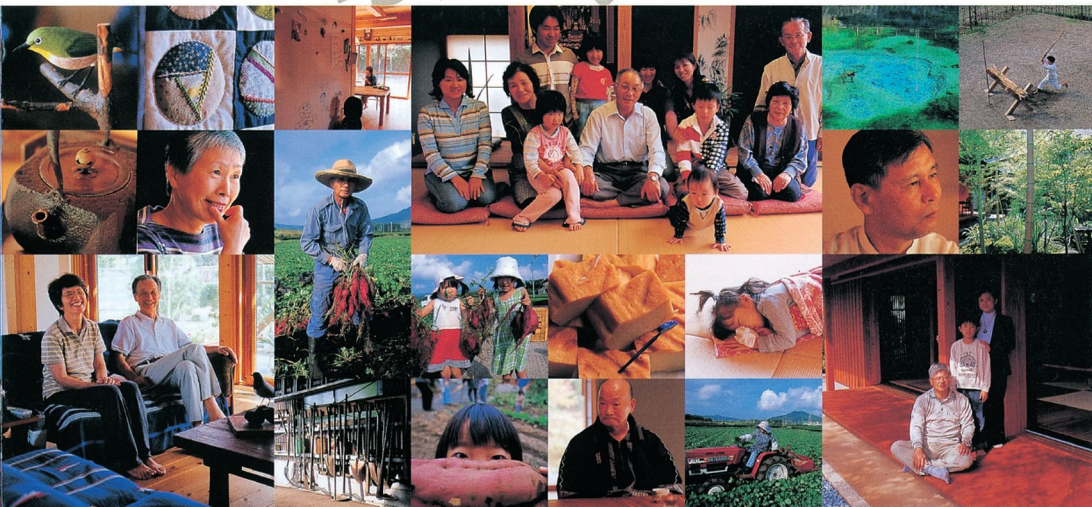
築

SLOW LIFE STAGE

さんさん

築

SINKEN  
STYLE  
Concept Book







# 楽

やるべきことはやった。やりたいことならいっぱいある。  
そんな自由を後押しする、シンケンの家づくり。

## SLOW LIFE STAGE

さんさん

# 楽

**SINKEN**  
**STYLE**  
ConceptBook



やるべきことはやった。やりたいことならいっぱいある。  
そんな自由を後押しする、シンケンの家づくり。

C O N T E N T S

皐皐 さんさん

プロローグ 006

第1章 50を過ぎたら自由型 010

- 01 山川の家 / 河本敏夫さん、佳子さん 012
- 02 川内の家 / 大久保三郎さん、奈利さん 022
- 03 鹿屋の家 / 中澤良次郎さん、桂子さん 032
- 04 西伊敷の家 / 坂ノ上敏孝さん、イツ子さん 042
- 05 吉野の家 / 白楽義仁さん、景子さん 052

第2章 故郷への想いが帰る場所 062

- 06 穎娃の家 / 西俊寛さん、豊子さん 064
- 07 菱刈の家 / 鶴田幸伸さん、由紀さん 074

第3章 地域のなかで役割を果たす 084

- 08 吹上の家 / 穂園幸郎さん、律子さん 086
- 09 垂水の家 / 天野信道さん、睦美さん 096
- 10 「湧泉」ひらしまグロニック / 平島忠久さん、孝子さん 106

第4章 ロングライフな快適住宅への試み 120

シンケンで家を建てようと思ったわけ ●インタビュー

高樹沙耶さん (女優・ナチュラリスト) 122

LLBという考え方

- 1/家も人もロングライフ・全国に広がるLLB研究会 128
- 2/木材と金物 130 3/セントリコン・システム 132
- 4/土壁のように呼吸する多機能ボード「モイス」 134
- 5/温熱環境を心地よくコントロールする ソーラーシステム《そよ風》 136

シンケンのモデルハウスに来てみてください 142

シンケンの提案する新しい不動産のかたち/SUNSUN TOWN 144



やるべきことはやった。  
やりたいことならいっぱいある。  
そんな自由を後押しする、  
シンケンの家づくり。  
—— 粲粲世代にふさわしい  
ベーシックハウスとは？

**SINKEN  
STYLE**



家の理想のあり方を  
模索した30年から、  
「シンケンスタイル」が  
生まれました。

シンケン は家づくり30年。

いまでは鹿児島を中心に多くの方に知っていただき、  
1000棟を超す家をつくってきました。

その場で敷地や近隣の状況を見、お客様の話を聞き、  
そこにあるべき形を見出すというやりかたを貫いています。

多くのお客様と、真剣に家づくりに取り組むなかで  
学んだ一つ一つのできごとを検証し、

これまでの良いところは活かし、

見直すべきは修正し、理想のあり方を模索する中で  
「シンケンスタイル」が生まれました。



どの家も、安全や健康を守るという機能だけでなく、家族が暮らし、育ち、人間関係をつくる場所として、いい住まいであることを心がけています。

居心地のいい快適な空間で、

家族が和やかに生き生きと暮らす場を創造し、築くこと。

太陽、風、雨、樹木や草花などなど、

四季の移ろいや自然の摂理に学び、

それを日々の暮らしに活かし、

家族が生きる喜びを分かち合う、

「情愛」に満ちた暮らしの場を構築すること。

また家づくりは、一生に一度の大きな買い物。

上質で永く愛される家づくりは、

お客様の資産を守ることにもつながっていると思います。

そんな思いを、全スタッフで共有しながら

家づくりをしてきました。

良い仕事をするのが、良く生きることに柱になると、

シンケンのスタッフも、公私の区別なく日々とりくんでいます。

若いスタッフが多いのですが、それぞれのパワーの相乗効果で

競い合うように仕事をする様は、

お客様にも元気を与えているようです。



# 粲粲世代の生き方を 後押しする、 シンプルで知恵のある 住まいをつくります。

家をつくりたいお客様には、二つのポリシーがあります。

一つは、これから子育てをしようというお客様。

子どもにいい環境を求め、

家族のコミュニケーションのとりにやすい空間であることが優先。

もう一つは、そろそろ引退後の生活を射程に入れて、

第2の人生を生き生き過ごすための家を求める方々。

「終の棲家」という言葉もあります。

シンケンで家を立てたい方に実際にお目にかかること、

とてもそんなイメージではありません。

むしろ、子育てを終わり、仕事もまもなく勤め上げる、

そのあとは何をしようか、楽しみにワクワク待っている人。

社会の一員としての大きな義務は果たし、

これまでに得た知識、技術、交友関係を広い意味で活かしたい、

またこれまで忙しくてなかなか時間が割けなかったことに、

あらたにチャレンジしたいと意欲満々な人。

その元気に圧倒され、シンケンはこの方たちを、

粲粲(さんさん)と輝いて生きる

粲粲世代と名づけました。





その方たちが求めることは、このようなことです。  
暮らし方はシンプルにしたい。

できるだけ自然体で、力まずに生活したい。  
好きなことに時間を割きたいから、

家事に多くのエネルギーを費やさなくていい家になりたい。

かたづけ一つとっても、同じ量のモノ、同じ大きさの家でも、  
家の構成によって、整理のつく家とそうでない家があるのです。

そんな希望は、すでにいくつかの住まいに暮らした

体験からくるものです。いろんなスタイルもいけれど、  
もつこれからは自分スタイルで暮らしたい、という

豊かな生活の蓄積が言わせる言葉だと思えます。

深い知恵をもって、家づくりを楽しむ世代なのです。

そんな世代に似合う家、そんな豊かな世代にふさわしい家。

美しい庭に親しみ、シンプルだけどすべてを備えた家。

輝くコーラデンエイジ、榮榮(さんざん)世代の、

自由な生活を後押しするような家です。

榮榮世代との家づくりから、シンケンスタイルは

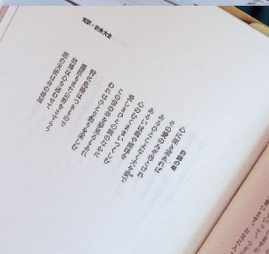
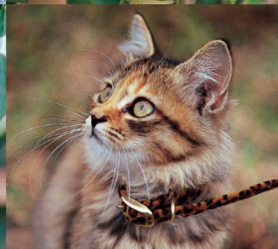
また深まっています。理想の家づくりに近づいています。

『SINKEN STYLE 新しい暮らしと自分発見』

『LONG LIFE BOX 日本のベーシックハウスを考える』

にこの本では、そんな榮榮世代との家づくりを  
ご紹介していきます。





第1章

# 五〇を 過ぎたら 自由型



漁師に憧れ、今日も船を出す夫。  
妻は本をとおして、  
地域の子どもたちとかがわる。  
この町で、この海で、自由道を  
まっとうする。



「今」を生きる  
ふたり

家のとなりにあるガレージでは、河本さんがネイ「ゴさばきの真つ最中。「ネイチ」とはカンパチの子のこと。「カンパチって『間八』って書くんですよ。八の間。魚を真上から見ると頭のところを左右対称に八の字の模様があるから」と説明しながらスィスイ包丁をすずめていく。昨日開聞岳の下で釣れたこのネイ「ゴは2・7キロ。「大きいもんは10キロくらいあるんだけど、ちよっとこれは小さいね」と残念そう。ほんとは「今朝釣ったばかり」と言いたかったところだが、「ゴ日は全然ダメ。昨日釣っておいでよかった」と舌を出した。

河本さんの家から山川港まではほんの50メートル。風向きによって港周辺に立ち並ぶカツオ節工場からブーンと響く煙す番りが漂ってくる。ここは漁師の町、船乗りの町である。河本さんは目下のところ地元漁業組合への加入を目指して年間120日間船を出し、漁の実績を上げることに夢中だ。釣れた魚は指宿のセリに出す。よそからやってきたいわか漁師ではあるが、河本さんのこの毎日の頑張りを通して地元の人たちも自然に受け入れてくれたようだ。

敏夫さんは子どもの時から船乗りに憧れていた。

「なんたつて石原裕次郎の世代だから、まずモチたい、かっこいい、ただそれだけの理由で(笑)」

# SLOW LIFE STAGE

01

やまがわ

## 山川の家

河本敏夫さん、佳子さん





上・山川港の湾をグルッと回ったところに係留してある「ARGO」号。真っ白な船体に横文字の名前が書かれているあたり、地元の漁船とはちょっと違う雰囲気を感じ出している。

下・かかった！ 明け方から奮闘すること数時間、ようやく獲物をしとめることができた。15ページ上・きりりと引き締まった海の男の横顔。イメージはもちろん石原裕次郎。

下・ガレージの2階は男の城である。釣りの道具と、それを整備する工具がどっさり。





それで、大学を卒業してからタンカ  
ーのエンジンアとして船に乗った。ブラ  
ジルから白土やアルミのインコット、北  
米・カナダから木材を、23万トンの貨  
物船に積んで7つの海を駆けめぐった  
ことも。年のほとんども船上で過ごし、  
1、2カ月陸地上がる生活を、定年ま  
ですつと続けてきた。

「それとそれでメリハリがあつて面白  
かつたけど、定年を迎えた時には正直  
ホツとしましたよ。やっぱり海の上にい  
ると気が休まらないから。船のエンジンは  
たった1日止めただけでも大変なこ  
とになりますからね」

4年前、58歳の誕生日の前日、船を  
下りた。でも、その2年前から自分の  
船を買おうと決意していた。ヨットか釣  
り船か、どこか船が置ける場所を見つ  
けてセカンドハウスでも建ててのんびり  
しよう、と探して当たったのが今の土地で

ある。銭湯が立っていた敷地で源泉があつ  
ていたのも気に入った理由の一つだ。

この温泉付きの土地、というのには  
ちよつぱり切ない思い出がある。河本  
さん夫妻の一人娘、佳織ちゃんは生ま  
れつき身体にハンディキャップを持つて  
いたが、とつてもお風呂好きだった。思  
うようにならない手足も良かったがお湯  
に浸かればのびのびと柔らかく軽くなつ  
て、気持ちも晴れ晴れとしてくる。お風  
呂ではしゃぐ娘を見て、もともと熊本  
の八代に家を持つていた河本さん夫妻

は、佳織ちゃんのために霧島に温泉付  
きの土地を買つたのだ。ところが家  
を建てる直前に、佳織ちゃんは残念な  
がら15年の短い一生を終えることになる。  
「とつても明るい子だったんですよ」

佳子さんは朗らかにそう言いながら  
写真を見せてくれた。どれもみんな笑顔



いっぱい。佳子さんも敏夫さんも何か  
を乗り越えた人の明るさを持つて写真  
を見つめる。そう多くは語らないけれ  
ど、この子はあり余るほどの幸福な時  
間を与えてくれた、だからそれでいいじ  
やない、と、きつと心の中で言つてるん  
だらう。

しかし、本当に驚くほど一人はさば  
さはと「今」を生きている。「なんでも  
前向きとらえるようにしてるの。あまり  
細かく考えない」と佳子さん。

「両親を見送つたり、佳織ちゃんとの  
別れがあつたりした数年間のうちに  
は、敏夫さん自身も腰を病んで、一時  
はみんな一緒に同じ病院に入院してい  
たこともあったぞうだが、こんなに「当  
たら」んなら、と宝くじを買つたけど当  
たらなかったと笑い飛ばせるほどに強  
い。話を聞いているこっちの方がときま  
きしてしまうほどだ。」



## 釣りで冷えた身体を 温泉で暖め、晩酌を

霧島は山登りもできて自然がいっぱい。でも、最初に建てた家は夏涼しくていいけれど冬の寒さが難点だった。腰の手術の後遺症で足がいつも冷たい敏夫さんは、今度は冬暖かい家を建てようと思った。幸い、この山川は地熱が高いので工夫次第でいい家ができそうだった。たまたま以前何かの本で読んで知っていたOMソーラーの家について改めて調べてみると、自然のエネルギーをうまく活用できることがわかった。

「やっぱりエンジン・ニアですから、性能の良さに惹かれましたね。ハンドリングボックスの仕組みとか、屋根で集めた太陽熱をダクトで地下に回すシステムが面白いと思った。予算があったら雨水利用とか風力発電もやりたいですね」  
山川港に船の係留場所も確保でき、ヨットか釣り船が迷ったけれど、やっぱり漁船を買いここに決めたい。船の名前は「ARGO」。アルゴとはギリシャ神話に出てくる船の名前。金色の羊の皮を獲てくれば王位を渡すと言われ、オリエントの海に出て行く勇者シェインが乗る船である。

家はこれからの夢を叶える豊地である。ガレージには釣ってきた魚をすぐにおろせるように流しをつくり、2階には釣り道具の手入れができる男の城もつくった。ガレージと直結している玄関からは即キッチンにアクセスできるように



16ページ・海の恵みに感謝しながら、今日も新鮮な料身を乾杯！ 話もお酒も進む。  
上・四畳半の部屋はともあるお風呂。窓側の浴槽の縁を低くして、向こう側に湯があふれるように設計されているので、窓を開放してお湯に浸かれば、まさに露天風呂気分だ。左上・2階の海側は書斎兼ゲストルーム。屋根の傾斜に包まれて落ち着く空間だ。  
左下・階段と吹き抜け、トイレを挟んだ反対側の部屋は夫妻の寝室。大きなルーフトウがあって、風通しも抜群。

なっていて、そこにも大きなまな板がいくつも並んでいる。

1階はアイランドカウンターとタイミング、リビングまでワンフロアすべてがオープンにつながっているのので、釣り仲間と宴会をするのにもいい。そしてリビングの一角には自慢の巨大スピーカー。ソファに身を沈め、お気に入りのジャズを聴きながらグラスを傾け、魚の勉強をするのである。

そして家の要はなんといつても温泉を生かしたお風呂だ。元銭湯だったというだけあって、湯量も豊富で温度も高い。そのままでは70度もあるので水でうめないと熱くて入れないほど。脱衣室と浴室はちよつとした保置所並みの広さで、廊下から洗い場まで段差なくフラットに続いている。浴槽の縁の高さは車椅子のシートの高さと同じ。そう、佳織ちゃんの友達やその家族が、いつでも気軽に遊びに来られるように準備してあるのだ。

「もちろん自分たちの老後のことも考えてね。バリフリーなんてたいそんなもんじゃなくて、こうしておけば誰でも使いやすい、ってこと」

釣りで冷えた身体を暖めるのに温泉は欠かせない。窓を開放し、庭を眺めながらどっぴり肩まで湯につかり、刺身を肴に晩酌を楽しむ。くうー！ 最高ですね。



これまでの人生、これからの人生。  
分岐点で巡り会った土地と人々。  
家は夢を叶えるための基地である。



## お年寄りにも子どもにも、 本の世界を届けて

そんな夫を眺めながら、「アツシは子ヨコレト」ミユアリがあははいいの」と佳子さん。根っからの本好きで図書館司書の資格を持っている。図書館は「コミュニティの中心にあるべきもの」だから、どこに住んでもまず図書館に行けば何かしらの人間関係が築ける。と佳子さんは言う。そんな佳子さんが霧島時代から続けているのが本の読み聞かせである。この山川に来てからは地元の主婦6人によって結成されているボランティアの「お話し会」に所属して、図書館や公民館で本の読み聞かせを行っている。

今日は大山公民館。山川地区にある4カ所の公民館では「お話し会」だけでなく、日替わりで紙飛行機づくりや折り紙、メンコ遊びをする「ふれあい教

室」も行われている。それぞれ活躍するの地域ボランティアの方々である。

「学校が終わっておうちに帰るまでの間を過ごす、学童保育のような役割もあるんです。両親が共働きで家に帰っても独りでお留守番しなくてはならない子どもを地域社会で見ていること、ということです」

さて、本日佳子さんが読むのはアンネ・エルボルの『おつきさまは よるなをしているの?』。大きな絵本に子どもたちの目と耳が吸い寄せられて、みんな身じろぎもせずに聞き入っている。巻紙式にアレンジした『おおきななぐ』のお話では、全員が声をそろえて「うんとこしょ、どっこいしょ」とかけ声をかけていた。手遊び唄や昔話の朗読、紙芝居……。

「最近はお呼びがかかる回数が増え、お年寄りの施設や小学校にも出張するんです」

そんなわけで、出番前の準備も結構忙しい。昼間のダイニングテーブルは朗読の練習とテープ録音をする佳子さんのスタジオに早変わり。読み聞かせに使う小道具づくりに力が入る。

今日も敏夫さんは「ARGO」に乗って海に出る。錦江湾の入り口近くがいちばんいい漁場だ。アジやサバ、夏もネイゴとブリ、秋はタイ、冬に住んでも釣れる。これで漁協組合のナンバーが取れたら、トロリーング（引縄漁）だってなんだって好きなことができる。将来は遊漁船にすることも可能だ。

「2人とも、世界中どこに住んでもいいと思ってるんですよ。ケープタウンもいいなあ、なんて。でも、今はこの町で、この海で、自由道をまっとうしたいと思ってます」

日に灼けた顔をほころばせながら敏夫さんは胸を張った。



18ページ右上・公民館に集まった子どもたちに『おおきななぐ』を読み聞かせる佳子さん。低学年の子どもが多いが、みんな真剣に聞き入り、心から楽しんでいる様子だった。右下・ピアノの上には、大きな口を開けて楽しそうに笑う在りし日の佳織ちゃんの写真が。左・ジャズを聴きながら魚の本を読む河本さん。奥のダイニングでは、佳子さんがお話し会の準備に余念がない。上・吹き抜けからダイニングを見下ろして。料理してすぐにテーブルに出せるように、キッチンと一体になった便利なレイアウトだ。



# DATA

## 01 山川の家 (河本邸)

所在地 鹿児島県指宿市山川町

敷地面積 644.66㎡

延床面積 139.40㎡ (1階78.90㎡ 2階60.50㎡)

家族構成 夫婦

竣工 2001年1月

主な外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板横置き

外壁 杉下見板張り

建具 ローエン

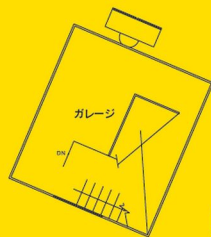
アツキ床 米ヒバ目造かし張り

主な内部仕上げ

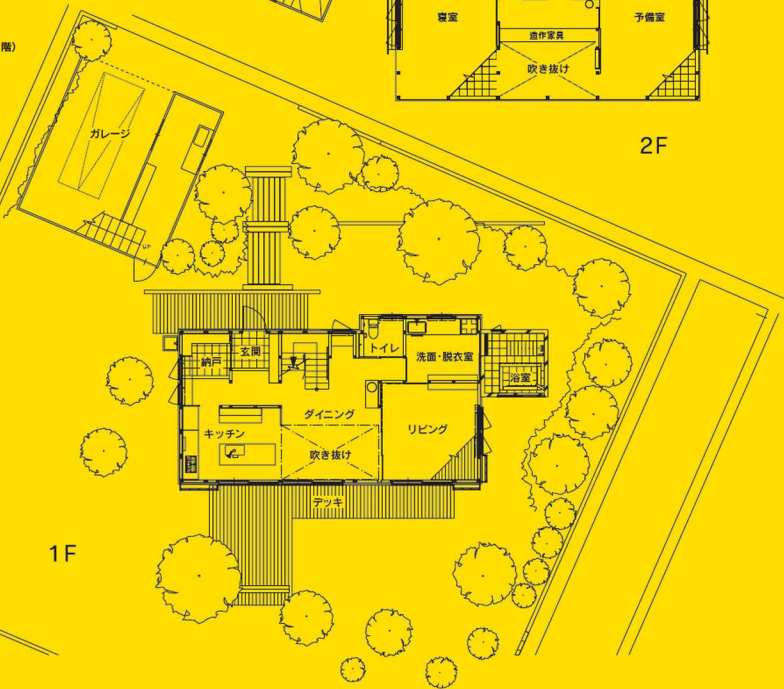
床 北欧パイン板張り(1階)、コルクタイル張り(2階)

壁 構造用スプルス合板あらわ仕上げ

天井 構造用パネルあらわ仕上げ



2F



1F



仕事中心の生活から、  
主夫業と畑仕事へ。  
好奇心旺盛な妻と二人で、  
「二人独立した生活」を目指す。



忙しくて家族を顧みなかつた、  
「母子家庭」時代

「遠いところよこそ。さ、どうぞと  
うぞ」と笑顔で迎えてくれたのは、こ  
の家の主夫である大久保三郎さん。夫  
人の奈利さんは、現役の看護師として  
日曜・祝日以外はフルタイムで働いて  
いるので、今日はお留守。

キッチンではご主人がかがいがしくお  
茶を用意してくれている。先にリタイア  
した夫が家事を引き受け、働き手であ  
る妻の帰りを待つという図はなかなか  
新鮮で微笑ましい。考えてみれば、共  
働き夫婦で年下の妻が定年を迎えるま  
での数年間、こうした時期が生まれるま  
といっのは当たり前のことなのだ。

しかし、大久保さんが昔から家事育  
児に協力的な夫だったわけではない。

「東京に住んでいた頃は、もう完璧に  
母子家庭でしたよ。息子二人は母親の  
背中を見て育ったんです。私は仕事と  
夜のつきあいでまったく家のことは家内  
に任せきり。クリスマスのサンタさんだ  
って遅れ気味で(笑)」

夫妻が故郷の川内に戻ってきたのは  
20年前のこと。聞けば高度成長期から  
バブル崩壊前の日本経済絶頂期、大久  
保さんは道路公園関係の企業でかなり  
へビーな日々を送っていたらしい。

42歳の時に会社が倒産。こたごたか  
ら逃げるようにして、鹿児島に帰って  
きた。

「自分の意志で戻ったわけじゃなかっ

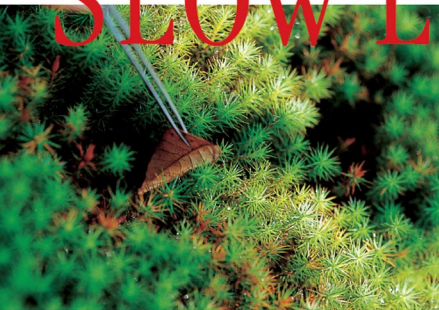
# SLOW LIFE STAGE

02

せんだい

## 川内の家

大久保三郎さん、奈利さん



たので、のんびりとした鹿児島県の風景にしばらくは馴染めなかったですよ。なんで俺はこんなところにいるんだろう、と思いました」

こちらに帰ってきてからは、家族を川内に置いて鹿児島市内に単身赴任。慣れないサービス業で人一倍働いた。結局、東京時代と同じように大久保家は母子家庭のままだった。

引退前は川内に帰って家族と一緒に暮らすことができたんですけど、朝5時半に起きて鹿児島市内に通う日々が3年8カ月続いて、通勤で疲れ果てましたね。もついい、つて気分でした

それでも、そういう時代があったからこそ今の落ち着いた暮らしがあるのかもしれない。やっと自由に生きられるようになってホッとしている。そこで大久保さんは笑った。

## ありふれていない 自分らしい家

さて、奥さまが在宅の日に再度お邪魔して聞いてみると、実は家づくりの話も20年前にさかのぼるのだといっ。

川内に戻ってすぐの頃、奈利さんは西日本新聞でパッシブソーラーハウスの記事を見つけた。

「まず冬暖かいこと、夏の湿気がないのがいいと思いました。共稼ぎで一日中家を閉めきったままでしたから、夏なんか帰ってくるのとムツとして大変だったんです。シックハウスの問題も心配してました。木はそういう悪い成分を吸っ



てくれるんじゃないか、と。家は見かけ  
じやなくて、快適であるというのがい  
ちばんですよね」

当時、奈利さん母子は実家でお父さ  
んと同居していた。ちょうど建て替えの  
話もあったのだが、お父さんはすでに知  
人の大工さんに依頼済み。どっちにし  
る音気質の人だったため、ソーラーの話  
なんかしても絶対ダメだったに違いない  
、と奈利さんは言う。結局お父さん  
主導で家は建てられました。

「それで今新聞の切り抜きは捨てられ  
ませんでした。しばらくして、鹿児島で  
シンケンがOMソーラーの家を建ててい  
ることを知って見学会にも行きました  
が、叶わない夢だと思っていました」

ところが転機は突然やってくるもの  
だ。ご主人の定年退職を数年後に控え  
て、お父さんが病気でなくなり、前後  
するように区画整理の話が持ち上がっ  
た。

「それで、よーし建てよう！ と。ち  
ょうど近所に進行中のシンケンの現場  
があって、ジョキングの途中で毎日立  
ち寄っていたんですけど、もういてもた  
ってもいられなくなってシンケンさんに  
電話しました」

当初、シンケンのシの字も知らなか  
ったご主人は、「セカンドハウスのよう  
な、「ソーラーのような……、どうもつ  
つうの家じゃないような気がして」しどし  
ど見学に付き合っていたそうだが、数  
軒見るうちにだんだん好きになってきた  
という。

24ページ・余計なものが何一つ置かれてい  
ないリビングダイニング。床に掘り炬燵を切  
つて、のんびり過ごせるようになっている。  
右・障子を開めると涼風に落ちついた和風の  
雰囲気。布張りの壁面の色が全体を引き締  
め、木目ばかりの空間になるのを防いでいる。  
下・リビングからはご自慢の庭と畑が一望で  
きる。「野菜づくりと庭の手入れて、旅行に  
出かける事もできません。苔や芝には、朝  
たけじやなくて夕方にも水を撒いているし、ち  
よつと過保護かな」と笑う大久保さん。  
左・階段の左脇が玄関。手前には寝室に続く  
書斎コーナーがあり、「ドイツ流シンプル家  
事学」なんて本も置かれている。



「いちばんいいのは、ありふれていない、という点。老後の家だから畳と仏壇は欠かせないと誰もが思うでしょうけど、見ての通りこの家には両方ともありません。住んでいてますます気に入ってきました。自分らしい家ができたと思いますよ。」

掘り炬燵こたゑのある板張りの床は、素足

に気持ちいい。きれいな好きの奈利さんの教育が行き届いているので（？）、どこもかしこもヒカヒカだ。インテリアは掃除のしやすさで決まっている。カレンダーも貼らない。部屋の隅にモノを置かない。基本的に平屋の家を建てたいと思っていたから、LDKと寝室と水回りだけのシンプルさである。

「部屋が全部つながっているから、毎朝出勤前にハーツと掃除機をかけられるんです」と奈利さん。ガラス拭きは週1回。休みの日は網戸も拭き、2時間かけて家中を磨き上げるといっから、もうこれは趣味の域である。「専業主婦の方は毎日そのくらいしてるでしょ?」。いやいや、そんなことはありません。



26 ページ・山の切り通しには涼しい風が吹き抜ける。植栽は、家周辺の山のモミジやカエデに合わせて行われた。「造園の方は、OMソーラーの機ダクトが見えるように木の位置を変えたりして、熱心でしたよ」。

左上・庭仕事関連の道具がどんどん増えるので、今度裏手に新しく物置を増設する予定。

下右・下中・丹誠込めて手入れされた庭。芝生も隅々まで青々としている。友人が植物の苗をプレゼントしてくれることもある。

下左・庭の片隅には、この家を建てる前に実家の池の脇に置いてあった石像。





## 定年が待ち遠しいほど、 やりたくなっちゃう

今の久久保さんは「毎日が日曜日」。最初から畑をやりたいと思っていたので、区画整理の造成時に業者に頼んで、あらかじめ黒土を入れてもらった。これまで土いじりなんてしたことなかったが、本や雑誌で勉強しながら、この1年で相当な種類の野菜をつくることができた。夏はシントウ、里芋、ゴーヤ、ピーマン、ナス、トマト、キュウリ、オクラ、ピッコロ、ナタマメ。秋にはタマネギ、ニンジン、ジャガイモ、大根、キャベツ、インゲン、ブロッコリー、ラディッシュ……。家で食べきれない分は奈利さんが病院へ持っていく。

畑仕事と庭の手入れは朝のうちに済ませ、昼寝をして、夕方になったら買い物に行つて料理をつくり、奈利さんの帰りを待つというのんびりとした繰り返し。

「料理も退職後に始めたんですよ。NHKの『今日の料理』で勉強して、雑誌を切り抜いてファイルして。この間イカスミを使った料理に挑戦したら障子に墨が飛んでさんさん叱られました(笑)」奈利さんだって仕事ばかりの毎日じゃない。

「50歳の時に夢を目指して目標を定めたいんです。一つはシンケンの家を建てることですよ。もう一つは泳げるようになること。昔、子どもと一緒に泳げなかった悔しさがあって、いつか家族みんなで



28ページ、「これがナタメですよ」と大久保さん。妻わら帽子に手拭いの百姓スタイルが懐に付いてきた。

右6点・太陽を浴びて栄養たっぷり育てた畑の野菜たち。大久保家は野菜に関してはほとんど自給自足である。八百屋が庭先にあるようであらやましい。

上・練磨のザルにはスライスされたカボチャや鷹辛などが干されていた。収穫の後も干すことはたくさんあるのだ。



**今までずっと別々に生きてきたけれど、  
これから2人の時間をどう過ごすか。  
今はその準備期間です。**

ないかもしれませんがね。

や「二人一人独立した生活」にはならないかもしれませんがね。

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

週末の午後の夫婦の会話。この分じ

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」

「お母さんはごいっつことを思いつくかなあ……」





# DATA

## 02 川内の家 (大久保邸)

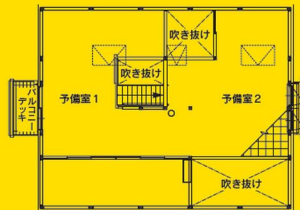
所在地 鹿児島県薩摩川内市天辰町  
敷地面積 605.82㎡  
延床面積 146.00㎡ (1階80.00㎡ 2階66.00㎡)  
家族構成 夫婦  
竣工 2004年4月

### 主な外部仕上げ

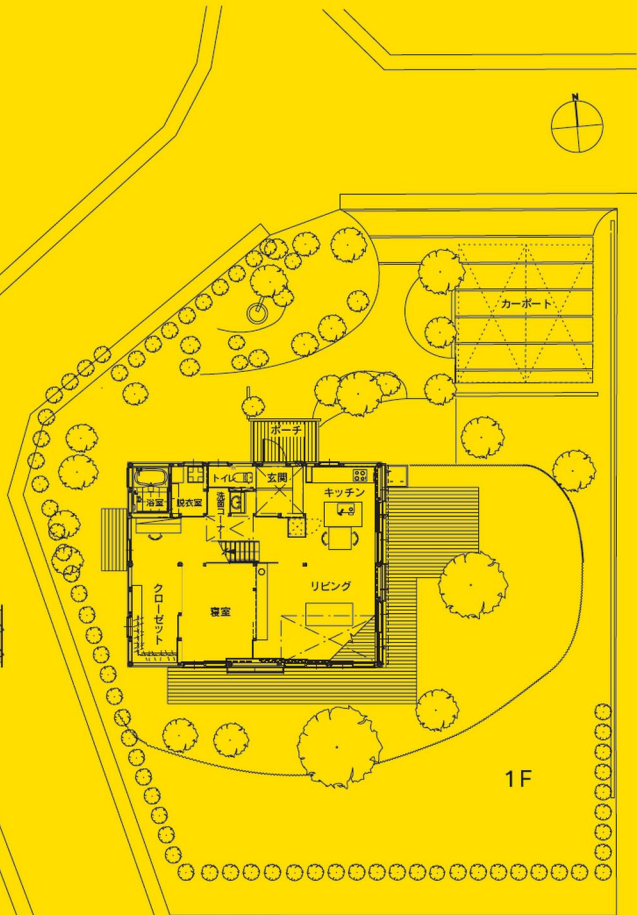
屋根 ガルバリウム鋼板横葺き  
外壁 コロニアル張り  
建具 マーヴィン(インテグリティ)  
デッキ床 米ヒバ目遣かし張り

### 主な内部仕上げ

床 津江杉板張り(1階)、コルクタイル(2階)  
壁 適産産松合板あらし仕上げ  
天井 杉横造用パネルあらし仕上げ



2F



1F

風が通り、  
太陽の光をいかす家に憧れて、  
東京から妻の生まれ故郷へ。  
人も気候も温暖な  
鹿児島暮らしを楽しむ。



## シンケンの家を 建てるため鹿見島へ

鹿見島の太陽は、東京の太陽とは工  
ネルギーが違う。「暑い」というより「痛  
い」。この鹿屋ではさらにそれが厳しい  
気がする。本日の屋外気温は35度。庭  
先では日除けのタオルを頭から被った  
怪しげな風体の北田カメラマンが、汗  
みどろになりながら撮影をしている。そ  
れを見て、中澤さんが妻わら帽子を手  
に追いかけていった。

でも、家の中は風が抜けて意外なほ  
ど涼しい。

「その北の窓の前は特等席なんです」と  
と夫人の桂子さん。「昔はこのへんの家  
もみんな北側を開けて風を通していた  
けれど、最近は北を閉じている家が多  
くなりましたね。」

ここは桂子さんが生まれ育った土地  
である。今シンケンの家が立っているこ  
の場所に、昔は黒光りする古民家があ  
ったそうだ。「前の家は敷地に平行に立  
ってましたけど（笑）」。

シンケンの家は太陽の光を有効に屋  
根に受けるために冬の日の角度に合わ  
せて建てられるので、周囲の家々と違  
って微妙に斜めを向いているのだ。

「家が曲がってるって言う人もいるけ  
れど、そんな時は、私が曲がってるから  
家も曲がってるんだ、って言うってやるん  
です」「主人はそう言うって笑った。」

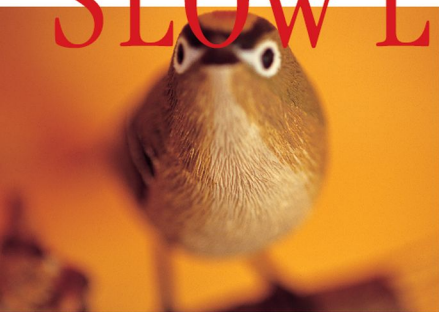
中澤さんは、長年獣医師として東京  
都内で動物病院を経営してきたが、会

# SLOW LIFE STAGE

03

## 鹿屋の家

中澤良次郎さん、桂子さん



社勤めをしていた桂子さんのリタイアを機に鹿屋に移住することに決めた。そのいちばんの理由が、シンケンの家を建てたかったから、というから驚くではないか。

「すーこのウチに憧れていたんです。最初にOMソーラーの広告を新聞で見たのが91年ですから、もう15年になりますね」

そう言って桂子さんは再びんだ新聞の切り抜きを見せてくれた。

夫婦二人ともクーラーが大の苦手。自然の風で暮らしたいけれど、家が密集する東京では窓を開ければ隣のエアコン室外機から熱風が吹き寄せる。当初は東京の工務店でOMソーラーの家を建てることも考えたが、何冊も持っていた関連図書に出ているシンケン家の写真を見ているうちに、「ひよっとしたら鹿児島島に帰ってもいいのかもしれない」と思い始めたそうだ。

「ここ数年、この辺りも昔と比べてすいぶん暮らしやすく変わって来ました。いろんな施設も増えましたし、今は地方も都市も情報の早さは同じです。飛行機代も安くなったので東京と往復するのもそんなに苦にならない。だんだん世の中、田舎志向になってきたみたいで、田舎暮らしもいいかな」と思い始めたんです。桂子さんはそう言う。

2005年に行われた内閣府の調査によれば、今、都市に住む50代の3割が農村漁村に移住することを希望しているらしい。移住とまではいかなくて



家の裏手には昔は竹林があつて、南から北へ涼しい風が吹き抜けた。  
35ページ・「この家がいちばん。帰ってくとホッとしますよ」と中澤さん。1階はこのワンルームのLDKとお母様の部屋があるだけ。シンプルな間取りだ。

も、都市と田舎の2地域居住、つまり週末滞在を望む人は45パーセントを超えている。問題はどこに移住するか、だ。

「その点、女房の地元というのは結構いいもんですよ」とご主人。「こちらに来てみたら、みんな奥さんに引きずられて来てるんですよ。お宅もそうでしたか！　なんて言い合ったりして（笑）」。

## 畑仕事と バードカービング

近所には桂子さんの親戚や幼なじみがたくさん住んでいて、何かと助けてくれる。花や野菜の苗を分けてくれたり、肥料持参で栽培方法を教えてくれたり、お米を持ってきてくれたり。こちらでは庭に続く菜園を「ヤシキ」と呼んでみんな自家用で野菜をつくっているの、自分の家で消費しきれない分を「もらつてくれないと困る」のだ。物々交換と支え合いが、今も自然なかたちで残る幸せな土地なのである。

東京の仲間たちには、近所に女房の親戚がいっぱいいると堅苦しいぞ！　なんて言われたけど、全然そんなことありません。

中澤さんは新天地でいい隣人に恵まれ大満足である。もちろん、もらつてばかりいるわけではなく、夫妻も野菜づくりに精を出している。この夏の収穫は、ナス、トマト、キュウリ、ゴーヤ、空豆、枝豆。他にもキンカン、ミカン、柿の木もあるし、最近は講習会に通ってバラづくりにも挑戦し始めた。



鹿屋で獣医さんをつらねてつくりはな  
かったんですか？ そう聞くと「いやい  
や、もう十分」との答え。

中澤さんは仕事一筋の時代が過ぎて  
時間にゆとりが出来ると、趣味のパー  
ドカービングに打ち込むようになった。  
ジェルトンという柔らかい木を削り、仕  
上げに彫金用のヤスリを使って羽の一  
本一本の流れまで表現する。図鑑や写  
真を見ながら彩色し、目を入れると、本  
物の鳥と見まじうばかりの姿はえてあ  
る。手先の器用さもさることながら、骨  
格や肉付きの正確さは、さすが動物の  
お医者さんだ。一度、東京都獣医師会  
の展覧会に出品した際、「剥製はダメ」と  
と動違えされたこともあるというから、  
その腕前は折り紙付きである。

大工仕事も得意で、こちらに引っ越  
して来てからは、オーデオ機器を置く  
引き出し付きの収納や文庫本棚、テッ  
キのオーニングも全部自分でつくって  
しまった。

「シンクンの現場を見ていて、大工に  
なればよかった、って本気で思いまし  
たよ（笑）」

**この家を建てるために鹿屋に戻った。  
今は地方も都市も、  
情報の早さ、便利さは変わらない。**



右・ヤスリや小さな彫刻刀がいついばい入った  
パードカービング用の道具入れ。柄の部分は  
使いやすいように自分で調整している。

左・窓際に置いていて、猫にねらわれたこと  
もあるという中澤さんの作品。いまにも動き  
出しそうだ。

37ページ右・新居の図面を受け取り、自分  
でつくった模型。屋根が開いて、2階部分も  
外せるようになっている。家具まできちんと  
造り込まれている。プロ顔負けの姿はえ。

左・首の角度とか、羽の重なり具合なども精  
巧だが、何と言ってもすごいのは、生き物の  
質感や柔らかさが感じられることだ。





## 身辺整理をして、 人生の第2ステージへ

一方、桂子さんも、「鹿児島にこの家を建てるという楽しみがあったからこそ、会社勤めを続けられた」というタイプ。早めにリタイアして人生の第2ステージに踏み出すことを心待ちにしていたという。

「引越しは、身辺整理のいい機会でした。捨てられなかった子どもたちのガラクタも、みんな思い切って片づけることができて、もっスッキリ！」

区切りをつけて整理すると、踏み切りがつく。ボンと新しい世界に飛び込む勇氣が出る。思い出を大事にするのもいけれど、後ろ向きに年を取るのも考えものだ。

「思い切ってこの家を建てて本当によかった。とくに冬が楽ですよ。幸せを感じます。鹿屋は鹿児島市内より3度は気温が低いけれど、去年は補助暖房を1回しか使いませんでした」

朝もスツと起きられるし、夜中にトイレに行くのも、何をするのもおっくうじゃないというのがいい。家が建つてす

くの頃、正月に近所の友人を招いたときには、暖かさには上層を忘れて帰る人が続出。「うれしくなりましてね」と中澤さんは笑う。

通りから緑の芝のスロープの先に見える三角屋根の外観には、日々を謳歌する若々しさが漂っている。明るくオープンな雰囲気に着かれてか、通りがかりに建物を見せて欲しいと訪ねてくる人もいられる。

将来は東京の息子夫婦も鹿屋に移り住んでくれたらいいだろうな、と夢はふくらむ。





38ページ・傾斜のある敷地を利用して、ゆるやかな階段を設けたアプローチ。両側の植栽も美しく、お店のような華やかさがある。右上・玄関ホール。パーティションの白い壁の向こうにすぐりビングが広がる。

右下・桂子さんがこだわった北側の開口部。階段の下から3段目が涼しい特等席である。

左上・吹き抜けからLDKを見下ろして。「間取りも2人でいるる考えたけれど、結局迫社長のプランがいちばんだった」そうだ。

左下・2階には桂子さんのパッチワークの道具やミシンが置かれている。壁にも一つ作品が。でも、今のところ庭仕事の方が忙しくてなかなか取りかかれない。





# DATA

## 03 鹿屋の家 (中澤邸)

所在地 鹿児島県鹿屋市輝之原町

敷地面積 1,089.24m<sup>2</sup>

延床面積 131.00m<sup>2</sup> (1階70.00m<sup>2</sup> 2階61.00m<sup>2</sup>)

家族構成 夫婦、母

竣工 2001年11月

主な外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板横葺き

外壁 杉下見板張り

建具 ローエン

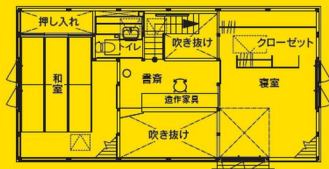
テツキ床 米ヒバ目遣かし張り

主な内部仕上げ

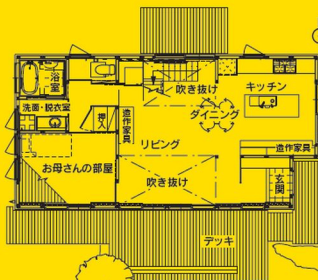
床 杉板張り

壁 構造用スプルス合板あらし仕上げ

天井 構造用パネルあらし仕上げ



2F



1F

家づくりは環境づくりだと、  
教育者としても共感。

これからの若々しく  
生きるための家ができた。



## 固定概念を脱がせた シンケンの本

ここは鹿児島市の中心部にほど近い丘の上の閑静な住宅地。道は丘の傾斜に平行して等間隔に走り、その道に正面を向くように同じくらいの大きさの家が整然と並んでいて、どこをどう曲がっても似たような風景が……。これは迷ったかな、と思い始めた頃、おもむろに周辺とはまったく違う雰囲気家の前に出た。雑木林の中でちよっと斜めを向いた屋根とオープンな玄関のテラス。これぞシンケンのトレードマークである。

「いや、最初はふつうに両開きの門とイヌマキの生け垣のある、瓦屋根の家を建てようと思っていたんですけど笑って言うのはこの春まで中学校の校長先生をしていた坂ノ上さん。家というのは、南側に石組みの庭があつて、砂利が敷いてあつて、松が植わつていて、飛び石があるもんだ。そういうものだ、こつあるべきだと長年思い込んできたのだが、その凝り固まった既成概念は、ある1冊の本によつて見事に打ち破られたのだった。

『さっかけはシンケンの黄色い本。あれを見て、コレだ！』と思つたんですよ。なにしろ根本的に考え方が違う。建物も魅力的でしたけど、その建物をつくる信念のようなものを強く感じましたね。まさに『シンケンスタイル』が貴かれていますと思えました」

# SLOW LIFE STAGE

04

## 西伊敷の家

坂ノ上敏孝さん、イツ子さん



本を手にしたのは、大隅半島の中学に赴任していた6年前だった。3年に一度の転勤が続き、これまでずっと田舎暮らしをしてきた坂ノ上さん一家。夫人のイツ子さんは、引退したら今度こそ町の暮らしを楽しみたいと願っていたそう。それで購入してあったのがこの土地である。実は、シンケンの本を見た時にはすでに地元の工務店から「ちゃんとした和風の家の図面」も送られてきていたらしい。いや、間に合ってよかった！

「本を見て展示場に行っただんです。もう心の中で決めていましたから、脳目もからずじままっすくシンケンの家に行きました。そして、驚いたことに営業担当者が昔の教え子だった(笑)」

## シンケンの会社 あり方に惚れました

最後の中学校を勤め上げるまでの3年間ひたすらシンケンの家を見て回り、いよいよ設計に着手したのが2年前。それまでに学んだことを生かして、間仕切りのない家にする、そして部屋ごとに用途を決めず、すべての部屋を無駄なく自由に使えるように、ということをいちばんに考えた。

「でも、2階に風呂のあるプランを見た時は、どうかなあと思っただんです。やっぱり先のことを考えて。ところが、その教え子が『先生、80歳で2階にキッチンつくった方がいますよ』と言う。それを聞いて、考え方次第なんだ、と氣



づきました。階段だつていい運動になる  
と思えばいい。負けちゃられない、つ  
て思いましたね」

ふつうの家の階段は廊下の隅っこに  
あったりするけれど、シンケンのは  
家の真ん中、みんながいる場所につく  
るから上り下りが苦にならない。ちょっ  
と腰掛けて団らんの輪に加わることも  
できるし、風や視線を通し、上下に家  
族の気配を伝える役目も果たしている。

「家の真ん中に階段があるのは、教育  
者の立場から見ても理想的です」と坂  
ノ上さんも太鼓判を押す。

「でも僕は、どちらかと言えばそうし  
た建物をつくるシンケンの会社のあり方  
に惚れましたね。考えなしにはそういう  
間取りは出てこないと思うんです。シン  
ケンのスタッフは若い人だけじゃなく  
て、ベテランの大工さんまで熱心に勉  
強している。現場を見ていて、これなら  
いい家ができるはずだと納得しました」  
今の若い子は、と、人はとかく批判  
的に言うけれど、子どもたちは昔  
も今も何も変わっていない、と坂ノ上  
さんは言う。変化しているのは子どもた  
ちを取り巻く周辺の環境だ。

でも、世の中は表面的な物事に気を  
取られて「人」をきちんと見ていない気  
がする。

大事ななのは社会のあり方、家庭のあ  
り方だと思っんです。そうやって考える  
と、家づくりというのは人を育てるつて  
重要な環境づくりなんです。よね」



左上・料理に必要なハーブをちょっと採つ  
て。イツさんの手料理はオリジナルの技が  
生きていて最高においしい。  
左下・3階のお嬢さんの部屋。本来半分はお  
父さんの書斎になるはずだったが、あま  
りの心地よさに占拠されてしまった。

44ページ・団らんの中心であるダイニング  
のテーブルは、営林署に動いていたお父様が  
プレゼントしてくれたケヤキの一枚板。  
下・入り口脇の菜園に続く庭。坂ノ上さんは、  
隣の家に配慮して敷板をルーバー風にした道  
社長の気配りをとても喜んでた。





軒が深く、板塀と縁があるので、隣家が迫っていてもまったく視線が気にならない。カーテンいらず、クーラーいらずである。  
47ページ・テッキは床の延長。「家がとても広く感じます」とイツ子さん。ここに暮らすようになって庭で食事をする楽しみが増えた。







## 家に合わせて

### 車も若々しいものに

この春、いちばん最初に担任したクラスの子どもたち（といってもみんな50近いのだが）が、退職を記念して集まってくれた。

「立派になって、もう対等に話ができる。昔話をしながら、ああ、教師をやってきてよかったなあ、と心の底から思いました」

現役時代、イツ子さんもご主人とは別の学校で図書室の司書をしてきたので、夫婦ともに常に生徒のことを気にかけてながら過ごしてきた。朝から夕方までチャイムの音を聞き、夫の掃りが遅いと何か問題が起きたのではと心配する日々。「ずっと学校の近くで暮らしてきましたからね。今はホッとしています。ここに住んでこそ気が楽になりました」とイツ子さんは笑う。

4月からイツ子さんは毎週市内の健

康体操教室に通って、町の雰囲気と友人たちとの会話を楽しみながら基礎体力を養っている。坂ノ上さんは週に2日非常勤で学校に通い、週に1日は趣味のテニスで汗を流す。

「あとは大工仕事をしたり、庭いじりをしたり。この家は斜めに振れているから、敷地の角で菜園、テッキ、和室の坪庭、いろいろな庭が楽しめます。ソファに座ればすべてを見渡すことができ、60坪しかないけれどすごく広く感じ



**合い言葉は「シンケンらしく」  
家を作ることで発見した新しい人生  
飾らず、シンプルに、しなやかに生きていきたい。**

48ページ・3階からデッキを見下ろして。周囲の家の緑も多く、互いに借景しあっているという感じだ。「春はお隣の桜越しに桜漏が見えるんですよ」  
上・アイランドキッチンで母娘仲よく料理。作業スペースが広くて使いやすいキッチンとダイニングはイツジさんの城である。

ます。全部開け放して床に寝ころんで  
いると最高ですよ」

感心するのは、1階の開口部が深い  
軒ですっぽり包まれているので、これだ  
け隣の家とくっついているのに、どこか  
も見えないということだ。レースのカ  
ーテンさえ必要ない。つまりどんな格好  
でも大丈夫、ということ、窓を開  
けて限りなく薄簾の状態を涼んでい  
るからクーラーもいらさない。

「いまに木がもつと茂って西日も遮つ

てくれるでしょう。この雑木林のような  
庭と板塀が気に入っています。通りか  
かりの人が「ここ喫茶店ですか？」って  
言うんですよ」

坂ノ上さんの弟夫婦が初めて遊びに  
きた時には「これは定年退職した人の  
家じゃない！」と驚きの声を上げたそ  
うだ。

「だから家に合わせて車も変えたんで  
すよ、若くならうと思って(笑)。車庫  
に入れて外から眺めたらものすごく合

つてる感じです。二人で元気でいい  
とね」

引越す時に、家の雰囲気に関わら  
ないモノは全部処分してしまった。アドバ  
イザー役を務めるのはお嬢さんの愛さ  
ん。目下のこと、坂ノ上家の合い言  
葉は「シンケンらしく」なのだとい  
う。インテリアや車だけでなく、もの考え  
方も、生き方も鼻本はこの家にある。柔  
軟にしなやかに、前向きに。まだまだこ  
れから新しい世界が広がりそうだ。



## 04 西伊敷の家 (坂ノ上邸)

所在地 鹿児島県鹿児島市西伊敷

敷地面積 193.03㎡

延床面積 144.53㎡ (1階50.03㎡ 2階49.00㎡ 3階45.50㎡)

家族構成 夫婦、娘

竣工 2004年8月

主な外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板横葺き

外壁 コロニアル張り

建具 オリジナル木製サッシ、マーヴイン(インテグリティ)

デッキ床 杉目造かし塗り

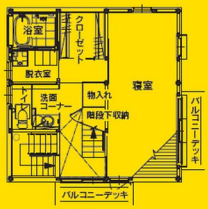
主な内部仕上げ

床 吉野杉板張り(1階)、レッドパインフローリング張り(2階)

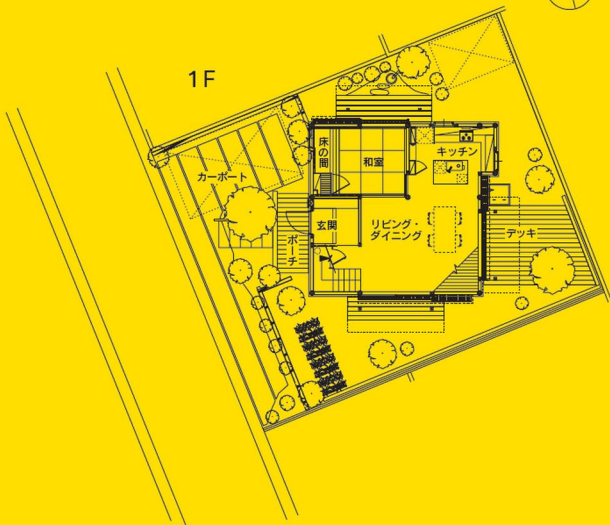
壁 造作黒松合板あらし仕上げ


天井 杉横造用パネルあらし仕上げ

2F



1F





暮らしを満喫していると  
心の底から言える。  
シンプルがいちばん、  
楽なのがいちばん。  
古い支度が家づくりの核心。

## デッキがいちばん よく使う「部屋」

丘の上に蒲酒な家々が並ぶ鹿児島市内の住宅地。白楽さんのお宅は、2軒分の敷地をたっぷり使った開放的なつくりがなんといつても見どころだ。正面から入っていくと、しっとりとした和風庭園とお茶室が大人の趣き。奥に進むとキッチンに直結したデッキが気持ちいいカジュアルガーデンがあって、それその場所であつたく違う過ごし方を楽しむことができる。

「いちばんよく使うのがこの部屋ね。景子夫人はデッキのことを「部屋」と呼ぶ。「こくに人を招かなくても、ここでぶつりにご飯を食べてます。少々の雨ならテントを出して。外で食べ慣れちゃうと、部屋の中で食べるのはどうもおいしくなくて」

外に向かつてL字型に設置したキッチンカウンターからは、食材やお皿を手渡してきえるようになっていて、こぼもつれつきとしたタイニングルームだ。

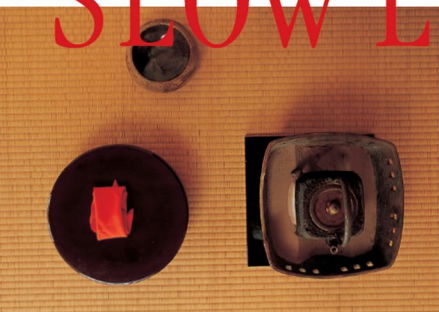
白楽さん夫妻は実はこれまで「たぶん7〜8回は引越している」という住まいの達人なのである。福岡から鹿児島に移り住み、会社を設立して事務所兼自宅に住んだ時代から、木造の家あり、RC造の家もあり、場所を移ることも、その場で建て替えたこともあった。そして、「こついたら気持ちよく暮らせるのでは」と思えることすべてを盛り込んだのがこの家なのだという。

# SLOW LIFE STAGE

05

## 吉野の家

白楽義仁さん、景子さん



## 求める「住まい」が昔とは違ってきた

白梁さんの仕事は、ホテルやレストランなどの外食産業が必要とする小物全般、例えば割り箸や紙ナプキンや歯ブラシその他、ありとあらゆるものを扱う卸業。消耗品だけでなく、メニューや包装紙のデザインや印刷、季節ものの小物の提案など、その業務は多岐にわたる。

もともとはネクタイを締めて外回りの事務用機器の営業マンだった。出先で中小企業の経営者と話を交わすうちに、「商売って面白いもんだな」と思うようになった」という白梁さん。そんな折り、たまたまあるお客さんから、お寿司屋さんで使うガリの卸しをやってみないかと勧められて、寿司桶、割り箸……と扱う品を増やしていったのが今日につながった。

「外食産業のはしりでしたね。目が回るほど忙しいけれど、季節ごとに新商品の企画を立て、自分のアイデアを形にしていくなじみもありましたし、グルメプームも手伝って不況知らず。夢中で働いているうちに、いつの間にかこまで来ていたという感じですよ」

そろそろ息子たちがハントタッチをする時期だろう、と考えたのは59歳のとき。自分が独り立ちした時のことを思えば、ちよつといい頃じゃないか。若い感性を前面に押し出して、後方でサポートに回ろう。白梁さんは60で引退することを決めた。

当時住んでいたのは会社から徒歩1分、繁華街にも近く、フットワーク抜群の好立地に立つRC住宅。たしかに経営者の生活を支える場としては、至極便利な家だった。でも、いまの自分たち夫婦が心の底で求めている「住まい」とは言えなくなってきた気がする。

白梁さんはリタイアにあたり、その家を新しい経営者となる息子さんに譲って、これからの生活のために、自分たちの家を別に建てることにしたのだ。

白梁さんの家には、これまで胸に抱いていた「やりたかったこと」がたくさん詰まっている。

「そのやりたかったこと、ついでいうのは、年齢と共にだんだん変わってきたんですよ」と息子さんは言う。

「若い時は憧れが先に立つてでしょう。その時代の流行であるとか、ヨーロッパインスタイルがいいな、とか。でもね、人間も練れてくると、求めるものの質が変わってくるんですよ」

もう物は増やしたいと思わない。業に纏らせる家でありたい。孫や子どもたちが気楽に集まれる場所にした。30年以上続けてきた茶室のための茶室をつくりたい……。







念願だったお茶室。四畳半だが周囲に縁が回っているので広く感じる。戸を開け放して八畳として使う場合は毛氈を敷くのだそうだ。



上・吹き抜けには大きな窓があって、空と庭の緑がすぐそこに感じられる。  
左・「つくった庭ではなく自然にしてほしい」と依頼してできた和庭園。新品だった障もいい感じになってきた。「茶室に座って庭石を見るとホッとします」と景子さん。57ページ・大好きな庭で二人一緒に。季節ごとに色を変える雑木林風の庭だ。



## 子どもにも、訪れる人にも 優しい場所

「でもいちはん重要だったのは、やがて来る老いに備える、ということでした」と景子さん。

これはちよつと意外な答え。老いのカケラも感じないこの家のどこにそんな備えか？

景子さんが老いに備える家を意識したのは、ご両親の介護をするお姉さんの姿が常に間近にあったからだ。一般的にすぐに思いつくのは、床をフラットにして車椅子が通れる広い通路を確保し、手すりをつけましょう、ということ。もちろんそれも大切だ。しかし、そこまで行く前の段階、つまり人の手を借りる前に、自力で暮らせる時間をいかに長く、明るく、充実させるか、というのがポイントなのである。

白楽さんの家は寝室を中心に考えられている。ベッドが置かれた二人の寝室の周囲には、お風呂とトイレとキッチンが間仕切りなくつながっていて、フラットな廊下は車椅子が楽に行き来できる広さに設計されている。

そして、二人の衣類は、寝室から浴室までの動線に組み込まれたクローゼットにすべて収納されている。主人の下着やワイシャツは洗面室の戸棚の中なので、汚れた衣類を洗濯機に入れて、風呂上がりにもその場で新しい下着と部屋着を出せばOK。朝も洗面室で顔を洗ってひげを剃って、棚からワイシャツ



を出して靴下を履けば、自然に身支度  
ができてしまふ。

「ほっ、よく自分の下層のありかも知  
らない男の人っているでしょ。その点う  
ちは全部自分でわかっているから世話  
要らずなのよ」と景子さん。

キッチンの収納も同じこと。どこに何  
があるのかわかって、取り出しやすく、  
しまいやすくしておけば、遊びに来た友  
人も、将来自どもたちや外部の人に手  
助けを頼むことになった時も、みんな説  
明入らず、手問いらすなのである。

「お茶室の立ち水屋も、高齢の知人が  
『立つまま使える水屋があったらいい  
わね』ってよく言っていたのを覚えてい  
て思いついたんです。これからのことを  
考えると、なんでも楽なのがいはんぞ  
すからね(笑)」

「シンプルがいははん、楽なのがいち  
ばん」というセリフが、景子さんの口か  
ら繰り返し出てくる。でも考えてみれ  
ば、優れたデザインとは思いやりの形  
だ。自分が楽であることは、小さい子と  
もにとっても、年寄りにも優しいといっ  
こと。自分が居心地よく過ごせる場所  
は、訪れる人にとっても楽しい場所と  
なる。人が集まる家には笑いが絶えな  
い。人に愛される家は何世代にも住み  
継がれる。……そうか、老いに備えるつ  
ていうのは、もしかしたら家づくりの核  
心をついているのかもしれない。

二人とも、育った家が木造の間仕切  
りも何もない家でしたから、この家はど  
こか懐かしさを感じさせてくれるんです



58ページ2点・赤松の床が美しい玄関ホール  
の左手が茶室。茶室の軒と開口部は庭の視  
線に合わせて低く抑えられている。  
上2点・景子さんのお茶屋は30年。お道具  
にも年季が入っている。「立ち水屋」は膝が  
悪くなった高齢者にはとてもうれしい。  
左・長いアプローチの奥にある玄関。

**もうモノは増えないし、欲しくない。  
今の自分たちが本当に求めていたのは  
まさにこういう家だった。**

よ。全部むき出しですから、壁の内側  
がどうなっているのかわからないんで  
いう心配は一つもない。冬暖かく、夏  
涼しいという建物の性能にも満足して  
います」と主人。「でもね、この家を  
建ててよかったな、と思うのは、太陽を  
感じ、風や緑を感じる暮らしの中で四  
季折々のよさを強く感じるということ  
です」。

デッキで食事をすれば、同じ料理で  
も一段とおいしいし、茶室から庭石を  
眺めるとホッとする。新品だった。跡も  
いい感じに苔むして、庭も建物もすつ  
と前からそこにあっただよように自然に馴染  
んできた。コナラにヤマボウシ、モミ  
ジ、ムラサキシキブ、ヤブツバキ……、  
秋の紅葉、冬の雪景色は我が家ながら  
ため息が出るほど美しい。

「よかったね、つてふだんの生活の中  
で自然に声が出ちゃうんです」と景子  
さんはゆつたりと微笑んだ。「太陽がい  
つぱい、つて映画のタイトルじゃないけ  
ど、ほんとにそんな感じ。暮らしを満喫  
している、と心の底から言えるのがうれ  
しいですね」。

2年前、この家を気に入った三男が  
近所と同じシンケンの家を建てた。

それで、今は孫のお守りが大要！ お  
茶どころじゃないの（笑）

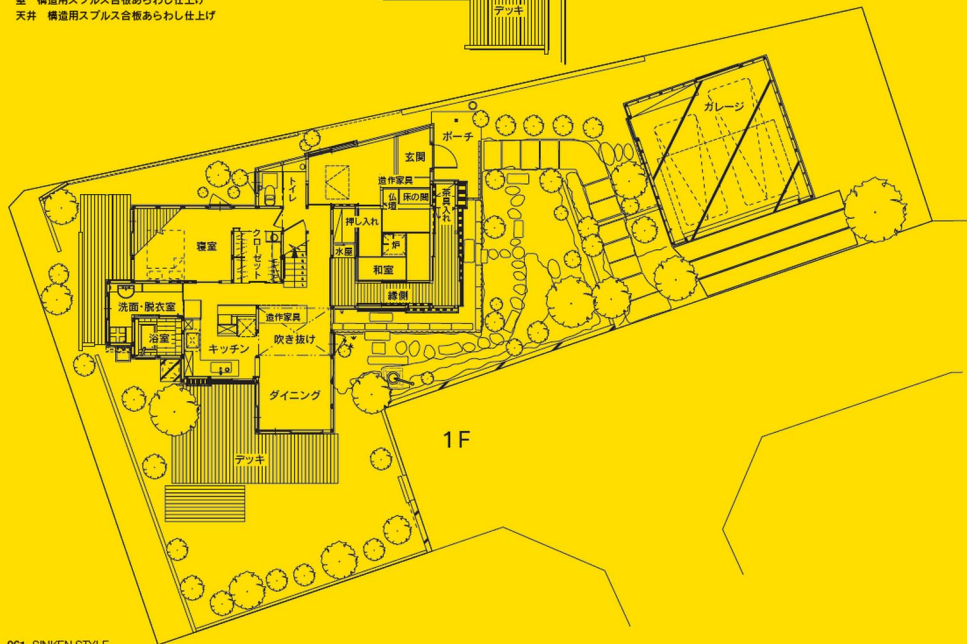
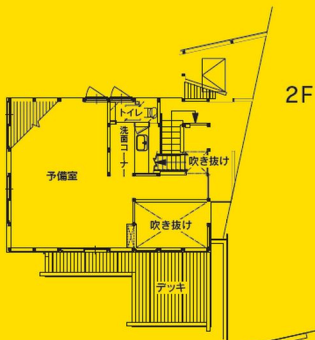
うれしい悲鳴の景子さん。しっとり  
優雅な隠居暮らしはまだまだ先のよう  
である。

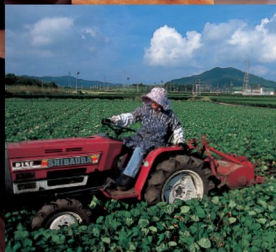


# DATA

## 05 吉野の家 (白楽邸)

所在地 鹿児島県鹿児島市吉野町  
 敷地面積 453.53㎡  
 延床面積 141.95㎡ (1階99.95㎡ 2階42.00㎡ ロフト47.00㎡)  
 家族構成 夫婦  
 竣工 1999年8月  
 主な外部仕上げ  
 屋根 ガルバリウム鋼板横置き  
 外壁 漆喰塗り(1階)、ペペルサイディング張り(2階)  
 建具 ローエン  
 テッキ床 米杉目透かし張り  
 主な内部仕上げ  
 床 赤松板張り  
 壁 構造用スプルス合板あらわし仕上げ  
 天井 構造用スプルス合板あらわし仕上げ







第2章  
故郷への  
想いが帰る  
場所





公民館と山と畑、  
三本立ての夫婦の毎日。  
親戚五〇人が集まる  
にぎやかな家。

## シンケンを見て、 価値観が変わった

指宿スカイラインで開聞岳を眺めながら山を抜けると、茶畑の緑が目につく。穎娃町に到着する。穎娃と書いてエイ、なんて語は鹿児島の人に説明する必要はないかもしれないが、知らない人は絶対読めない地名だ。

町の名産はお茶とサツマイモ。公民館の館長を務める西さんのお宅でも、その両方を栽培している。真新しい住まいの隣には、車3台とトラクターが置ける巨大なガレージ。畑の他に杉の山も持っているの、倉庫には肥料や農耕機具から枝打ち、下払い用機具まで、実にたくさん道具が並ぶ。

畑担当は主に奥さまの豊子さんで、山担当は西さん。小学校3年から父親の手伝いで馬を引き、畑や山で働いてきたという仕事のカンは、35年の役所勤務を経て公民館に勤める今もまったく変わらない。

山仕事が好き、ということは、木についてはちょっとウルサイ、ということだ。『家を建てるなら』『無節、柱目、四方柱』ってね、今もこだわる人はいますけれど、昔は自分もそういう感覚でしたよ。昔は。

それが、今は違う」と言い切るのだ。価値観が大きく変わったのは、息子に連れられてシンケンのモデルハウスに行き、理論を知ってから。

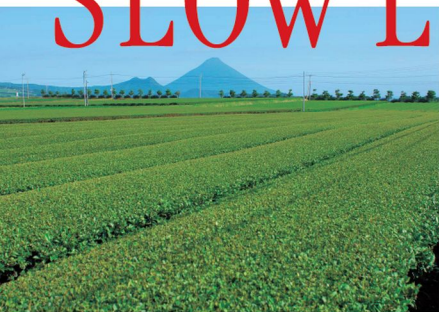
「例えば、大ト口は使わなくてもすべ

# SLOW LIFE STAGE

06

## 穎娃の家

西俊寛さん、豊子さん



てが厳選された木でバランスが取れていれば100年経っても持ち続ける、ということ。それに、意外でしょーうけど『割れる木は強い』ということ。木が割れるのは芯持ち材である証拠ですからね。私も含めて、ほとんどの人は見た目で判断してきたと思うんです。本質じゃなく、表面的なことばかりにこだわってきた。でもそれは間違っている、と気づかされました。

西さん夫妻が建て替えを検討し始めたのは4年ほど前のことだった。先祖代々住んできた敷地が計画道路予定地に入ってしまうことになって、それまで住んでいた建物を移築するか、新しく建てるのかを決めなくてはならなくなってきた。両親の代には瓦葺きの立派な民家が建っていた。それを建て替えたのは昭和55年だったから、まだまだ住もうと思えば十分住めるはず。西さんはかなり迷った。

「展示場を回ってみても、どれもこれも同じに見えて魅力的だと思える家がない。最後に行ったのがシンケンの家。それで『杉の家』に惚れ込んだんです。まず、木づくりの雰囲気がいい、余計な壁がなくて見通せるのがいい、太陽熱を利用して室内の温度を自然に調整できる性能にも納得できました」

実は、モデルハウスに案内してくれた息子さんもシンケンの家に住むシンケンファン。「この家を建てないと親姓に帰ってこないからね!」と冗談まじりに脅されたが、西さんはそんなことを言わ



れるまでもなく「これこそ、これからの家だ」と確信したそう。

「役所に勤めていたので地元の建築業者もよく知っていましたし、他のメーカーも次々に営業に来ましたよ。それで、みんな『シンケン』は高いですよ」と言っています。でも、高くてもそれだけの価値はあるから、つて答えるも二度と来ない(笑)。価格なんて関係ないんです。今は2倍の値でこの家を買いたいと言われても売りたいくないですわね」

寒い冬、この新しい家を訪れた人が必ず口にするのは「あれ!? あったかい!」のひと言。いったいどんな仕掛けがあるんだ、と問われると、西さんは自慢げに「コレだよ」とOMソーラーの赤いダクトを指さすらしい。

ここは標高が高いので冬の寒さがこのほか厳しい。以前の家も底冷えがして、「子どもたちが里帰ると、孫が必ず風邪をひく」ほどだった。それがこの家だと冬の畑仕事で芯から冷え切った身体も、6分で暖まる、と豊子さんは言う。

「この書、アメリカに移住した友人夫婦が帰国した際に1週間泊まっていったんです。最初は階段に手すりがないとか、2階の空間がもったいないと言っていましたけど、帰る頃には居心地良さと暖かさがすっかり気に入ってしまった。『同じ家を手造りたいんだけど、シンケン』はアメリカに支店持っていないのか?』つて聞くんではない」



66ページ・今日は長男と長女が子連れで里帰り。中央が西さん夫妻、右はお兄さん夫妻。右上2点・西さんが自慢する豊子夫人の料理。コガヤキ（卵と豆腐の厚焼き）とお煮しめ他、モンデアコン（採み大根）、ソマズシ（蕎麦雑炊）、カライモモツ（甘藷餅）など。左・吹き抜けから光が落ちるダイニング。

**山仕事をしているからこそわかる  
ほんものの木の家の心地よさ。  
冬の暖かさは何物にも代え難い。**



玄関の目の前が仏壇と床の間のある扉敷。でも、開放してワンルームにしてしまえば、堅苦しさのない日常の部屋として使える。



## ふた間続きの和室は ほんとうに必要か

お友達がもつたいないと指摘した2階のフリースペースは、益暮れに50人近い親戚が集まる西家には必要不可欠の存在だ。設計に際しては、宴会ができるふた間続きの和室と床の間、仏壇、そして大きな玄関が欲しいと要望を出していた。しかし、儀礼的な場よりも日常の生活の場を大切に考えるのがシンケン流。打ち合わせを何度も重ねて、ふた間続きの和室は座敷と居間の二つに分け、10畳は欲しいと主張していた座

敷も8畳に縮小することで落ち着いた。

その8畳の座敷も玄関ホールに連続しているの、まったく狭さを感じない。また、居間と雁行しているので、座敷で男性陣が盛り上がりがっている時に、適当な距離を開けて居間で女性と子どもたちがくつろげる、というのもいい。それに、座敷が縮小された方、居間には深い庇の下に広がるデッキを設けることができた。小さな孫たちはお母さんのそばのデッキで、大きな子たちはみんなを見下ろせる2階のフリースペースで駆け回って遊んでいる。

その2階の床は大部分の津江杉、1階

の床と壁は奈良の吉野杉、柱などの角材は熊本の人吉杉が使われている。まさに「杉の家」。色も風合いも違う杉が適材適所、うまく使い分けられている。材の説明をしながら「吉野杉はやっぱリコクがあるねえ!」と西さんは満悦だ。

末子相続の風習があるこの地域では、6人兄弟の末息子である西さんから息子さんに、さらにお孫さんに土地と家屋が引き継がれることになる。今年は待望の跡取り、聖平君が生まれたばかり。この家なら胸を張って次の世代に譲り渡すことができそうだ。

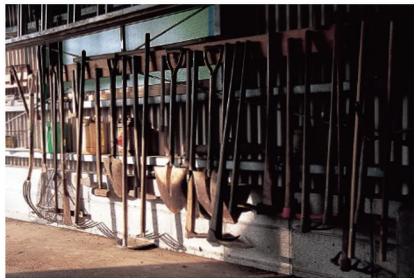


## 自然の摂理にしたがって、汗を流す

さて、そろそろ畑に行きましよう、と声をかけると俄然生き生きしてきたのは豊子さん。西さんに言わせれば「農業が趣味」というほど土が好きで、家じつとしていることはまずない。好きな畑を続けるために週3回は町営のプールで足腰を鍛え、自分の手が空けば近所の畑の「カセ（加勢）」にも行く。

畑に出ればもう豊子さんの天下である。トラクターを操る運転席から下界（さ）で働く夫に指示を飛ばす妻の姿は勇ましい。孫の和菜ちゃんと和音ちゃんは、土から顔を出した異つ赤なおいモに大はしゃぎだ。

赤いのは紅薩摩、白いのは黄金千貫







70ページ上・トラクターを操る豊子さんの  
舞姿。最近の手焼酎ブームのおかげで、焼酎  
用の芋の売れ行きも好調だ。

下・ガレージには整然と農作業用具が並ぶ。  
右・長男の剛俊さんの娘、和美ちゃんと和音  
ちゃん。「ほら、こんなに採れたよ！」

下・母屋に続くガレージで、収穫した芋を4  
し〜2Sまで7サイズに分け、出荷する。

左・美しく手入れされた母屋の庭園。



55アールの手畑の手前には漬け物用の  
大根畑、その向こうには45アールの茶  
畑が広がっている。

最近ではペットボトル用の固い葉が人  
気で、今年も高値がついたそうだ。夏  
の四番茶まで摘んだ後、秋肥をいっば  
いやつておくと、次の年またおいしい一  
番茶が収穫できる。「伸びた枝は3年に  
1回刈り込んでリニューアルするんで  
す」と西さん。低く刈るとびっくりした  
お茶はいい新芽を出すのだという。

畑に立つ防霜ファンは春先にセンサ  
ーで自動的に回る。地面から1メート  
ルくらいがいちばん気温が低くなるの  
で、7、8メートルの高さの暖かい空気  
を下に吹き付けることで霜を防ぐ仕組  
みなのだ、と西さんは解説してくれた。

次から次へと語られる農作業のノウ  
ハウ。なるほど農業は科学だ！

自然の摂理をいかに理解し、くみ取  
つていくかで作物の質と量が決まる。カ  
ンも必要だけど、理論がまず先にある。  
それは季節によって違う太陽の軌跡や  
風向きを読み取り、木材の性格を隅々  
まで生かすシンケンの家と共通する理  
念である。西さんがシンケンの家に惚れ  
た理由がわかった気がした。

「農業は未知数だから面白い」と西さ  
ん。公民館と杉の山と畑と3本立ての  
毎日はやることが山ほどあって退屈す  
るじまもない。「せつかくいい家を見て  
たのに、ちつとも家にいないんだから」と息子はややく。さて今日のお二人は  
どこで汗を流しているのだろうか。



# DATA

## 06 穎娃の家 (西邸)

所在地 鹿児島県指宿郡穎娃町

敷地面積 963.00㎡

延床面積 173.25㎡ (1階 114.27㎡ 2階 58.98㎡)

家族構成 夫婦

竣工 2002年3月

主な外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板横置き

外壁 杉縦目板押さえ張り

建具 マーヴィン(アルミクラッド、インテグリティ)

テツキ床 米ヒバ目造かし張り

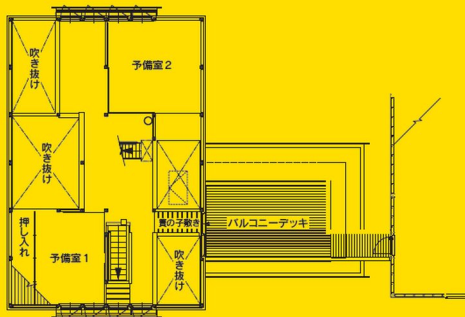
主な内部仕上げ

床 吉野杉板張り(1階)、津江杉板張り(2階)

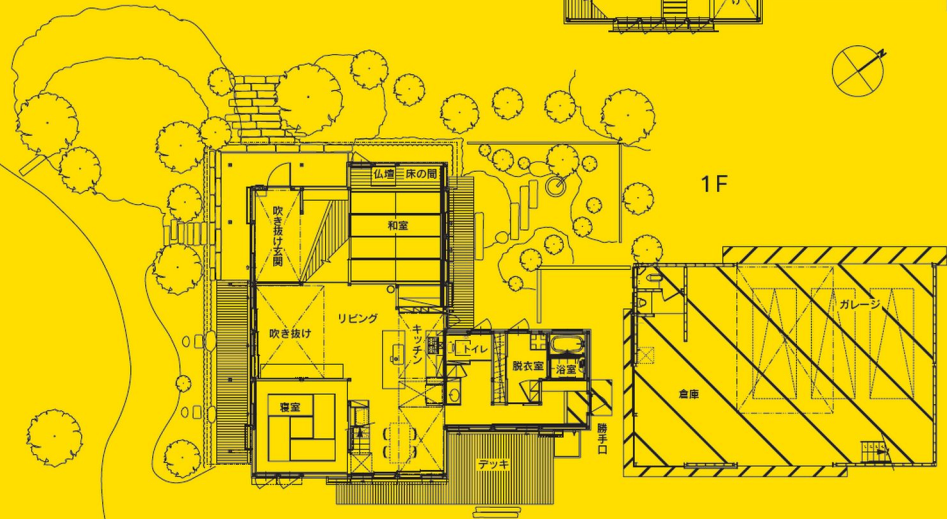
壁 吉野杉板張り、プラスターボード張り

天井 Jパネル

2F



1F



余計なものがなく、  
自然の摂理にあった家。  
冬も暖かく、心地よい。いずれは  
ここに帰つてきたいと思う。



父が倒れたことが  
きっかけに

今日は箱崎神社のふもとで集落のお祭のある日。絵本に出てきそうなこもり茂ったお社の山の前に鳥居がそびえ、その周辺では地元産物を売るにぎやかな市が立っている。今年も鶴田さんの母、信子さんも祭に奉納するかしを、近所の人たちといっしょにつくった。参道に並ぶかしは、どれもなかなかの力作だ。

この神社はその昔、元寇の役の従軍者が筑前国（福岡）の宮崎宮から分靈し、勧進したのははじまりとされている。つまり、集落自体がかなり古い歴史を持っているということだ。美しい石垣が積まれた鶴田家の前の通りは殿様の馬場だったそう。ちよつと前までは道の両端を「ははじも（馬場下）」「はあくつ（馬場口）」と呼んでいたという。

「うちにも石垣があつたんですよ。建て替える時、その丸い石をシンケンさんが庭つくり生かしてくれました。とくにお願ひしたわけでもないのに。あれには感激しました」

そう語る幸伸さん。土地の記憶はこうして次の世代に受け継がれていく。

幸伸さんの実家は、終戦の頃にお祖父さんが建てた築60年の建物だった。寒くて、家の中にも息が白かったのだから、いずれは建て直さなくては、と思っていたのだが、4年前に父親の松雄さんが脳血栓で倒れたのがきっかけで、話

# SLOW LIFE STAGE

07

## 菱刈の家

鶴田幸伸さん、由紀さん





は急に現実のものとなった。

「それ以前は、古い家を残しながらりフオームすることも考えていたんです」と幸伸さん。丑の家についてですよね。子どもを持つて、田舎はいいなあ、と思うようになりました。まわりの風景もたすまいも何もかもいい。教育の現場にいると最終的には家族、地域というものに行き着くんです。

今は桜島に住み、教育委員会の仕事をしている幸伸さんだが、元は教員として直接子どもたちを教えていた。田舎のよさに気づいたのは諏訪之瀬とい

う離島に赴任してからだ。

「何も無い島です。コンビニなんてとんでもない。最近やっと自動販売機が設置されたらしんですが、それがうれしくて、夜中にわざわざコーラを買いに行く人がいるくらい（笑）。その日獲れた魚をもらって食べて、山の幸を探つて、モノはなかつたけれどとてもせいたくな暮らしでした」

### 島べらしの豊かさに通じる

### シンケンスタイル

シンケンの家を知ったのは夫人、由

紀さんの友人を通して。その家に招かれて広々とした気持ちよさにすっかり魅了されてしまった。

「シンケンスタイル」の本を読んだ後、モデルハウスの「杉の家」を見に行ったら、落ち着いてしまつて何時間も居着いてしまうほどでした。縁側もすこくよかったです！ 祖母の家の縁側で近所の人がおしゃべりしていた姿を思い出しました」と由紀さん。

でも二人ともくに和風が好き、というわけじゃない。「余計なものがない」のが気に入ったのだ、と幸伸さんは力



76ページ・箱崎神社のお祭では、参道に手づくりのかかしが20体ほど並んだ。上・雛子3代そろっておしゃべりに花が咲く。「ゆくゆくは一緒に住むけれど、いかにも2世帯住宅にするんじやなくて、どこにでも豊られるように考えました」と幸伸さん。下・「前の家の床柱を使ってくれたのがうれしかった」と松雄さん。「工事の人がみんな礼儀正しくて、終わるのが寂しくなるくらい、家づくりが楽しかった」と信子さん。



説する。

「自然のままに暮らしたいというのはシンケンの考え方とびつたりでした。冬は太陽の熱で暖めて、夏は放射冷却で冷やして、木陰をつくって風を通して。自然の理理にかなっているし、余計なことは何もしていない」

それは諏訪之瀬の家や暮らしに通じる理念だった。幸伸さん夫妻は、シンケンの家のあり方に、助け合って暮らし人と人の関係や、あるがままに暮らし島の豊かさを思い描いた。

当初、ご両親は「住宅メーカーの家

ではねえ」という感じだったらしい。だが、信子さんは息子に連れられて「杉の家」を見に行き、「これならいい」と思ったそうだ。

「元」は言っても、建てている途中は、天井は低いし立派な欄間もない、これじゃご先祖様の写真もかけられない！ って心配したんですよ。ふつう、家は座敷にお金をかけるものと思っっているでしょ。だけど、えっこれだけ!? って、思わず言っちゃったくらいあつけない」

しかしその後、お寺のご住職に鴨居の上に写真を飾るのは正しいやり方で

はないと聞き、木工の上村さんとも親しくなって「シンケンはいつも仏間をつくらなんでしょうよ」と話を聞くうちに、しきたりというものも思い込みだったのだ、と気づいたそうだ。

「住んでみれば言っことなしの家です。本当にふた間続きの座敷なんて月に1度しか使わないものだ、と納得しました。前の家はホットカーペットと電気炬燵とストーブを入れて、それでもまだ寒かったですけど、いまは外が4度でも室内で16度ありますからね。分厚い上層はいらなくなりました」







夕間に浮かび上がる一家だんらんの図。室内とフラットに続く縁側は、縁の下の点検口を開閉できるように特別仕様になっている。



右・お勝手口の板土間。縁側とはまた少し違う、外のような内の空間である。  
上・幸伴さんと夫人の由紀さん。お昼寝から覚めたばかりの青那ちゃん、小春ちゃん。



**余計なものが何もない。何もいらない。  
人や地域、自然とのつながりの中で、  
あるがままに暮らせるぜいたくさ。**

**バリアフリーもごらなごぼう  
回復早く**

父の松雄さんも若い頃は学校の先生をしていた。青年師範学校を出てから16年間中学に勤め、その後は紡績会社の「求人（高校生の採用担当）」に。60歳で引退した後は、農業のかたわら地元の明徳寺の総代を務めていた。寺の仕事だけじゃない。地域の交通安全委員など、なんと23の役職について走り回る毎日だったという。

脳血栓で倒れたのも寄り合いの帰り道。運転中、急に目の前が暗くなって、乗っていた車ごと道路脇の柵に突っ込んでしまった。瀕死の状態だったが、意識がないままに「ああ、お寺の幼稚園で子どもたちに教える約束があったんだと、なぜか思ったぞ」と。

「それで白装束と黒装束のお迎えから逃れてこの世に戻ってきた（笑）」

たどたどしくもすっかりとした口調で、そのときのことを話す松雄さん。もともと前向きな性格だったので、すぐに治ると信じてリハビリにも熱を入れたそうだ。結果、右半身に麻痺は残るものの、つかまっして歩けるまで奇跡的に回復した。

「最初のうちはベッドにしくくちゃ、家中バリアフリーにしくくちゃ、という考えでしたが、あんまり回復が早いので、そのうちに何も必要ないワ！（愛）ということになって」と信子さん。いまだから笑って話せることだ。



右上・2階は今のところ幸伸さん一家が帰ってきた時にだけ使われている。将来の同居に備えてキッチンにもできる小さな洗面カウンターが付いている。

右下・ダイニングが家の中心。松雄さんの居間はこの手前の和室で、そこから家族の様子が見渡せる。

右・孫たちの描いた絵があちこちに見える。軸装して床の間にも。

上・「床も畳も同じ温度なのが気持ちいい」と松雄さん。子どものお昼寝にも最適。



松雄さんの居場所はLDKにオープンにつながる和室である。やっぱり畳がいい。畳の下にもソーラーシステムの暖気が回るようにしてあるので冬も暖かっただし、ここなら家族みんなの姿がよく見える。

吉野杉を使った家は、床の足触りも柔らかく、小さな孫たちが走り回っても転んでも安心して見ていられる。居間からフラットに続く広縁も、松雄さんのお気に入りの場所だ。信子さんもここで近所の人たちとこいっしょにお祭りのかしをつかった。

勝手口の板土間には、幸伸さんがお父さんのために木の枝を削ってつくった手すりが取り付けてある。板土間は敷地内の一角で信子さんが営む小さな「よさず屋」への通路であり、松雄さんが庭に出るルートでもある。芝や畑の草取りはリハビリにもなるらしい。今日はその庭の畑で、夏季ちゃん、青那ちゃん、小春ちゃんとお手掘り。月に1、2度はこちらに帰って過ごしているという幸伸さん一家も、ゆくゆくはここで両親と住むつもりだ。

「今の家がいちばんいい」

松雄さんは息子たちを眺めて大きくうなずいた。



# DATA

## 07 菱刈の家 (鶴田邸)

所在地 鹿児島県伊佐郡菱刈町

敷地面積 1323.99m<sup>2</sup>

延床面積 186.50m<sup>2</sup> (1階 100.00m<sup>2</sup> 2階 86.50m<sup>2</sup>)

家族構成 父母 (将来問題予定)

竣工 2003年9月

主な外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板横置き

外壁 モルタル刷毛引きの上、ソフトリシン吹き付け(1階)、杉目板押さえ張り(2階)

建具 オリジナル木製サッシ、マーズイン(アルミクラッド)

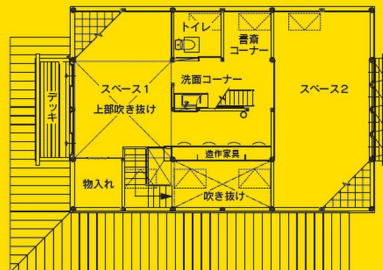
デッキ床 米ヒバ目造かし張り

主な内部仕上げ

床 吉野杉板張り(1階)、コルクタイル張り(2階)

壁 杉板張り、プラスターボード張り

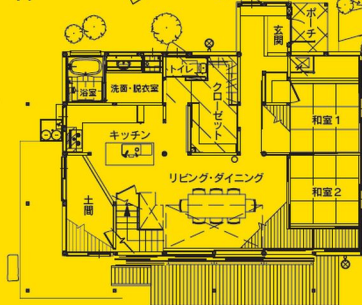
天井 杉横造用パネルあらわし仕上げ



2F

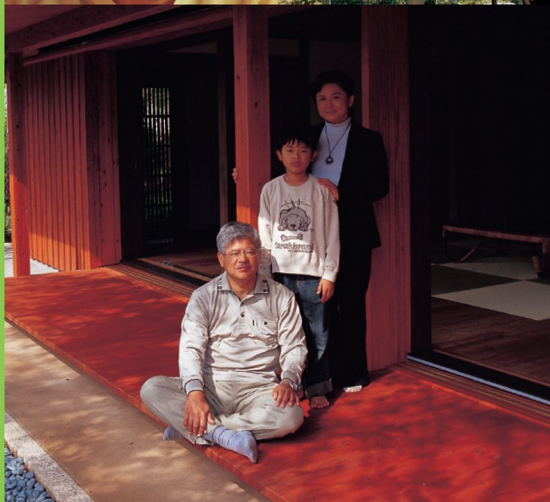
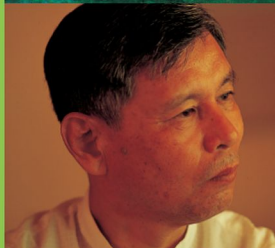
お田さんの商店


1F





第3章  
果たす  
役割を  
地域のなかで





勉強することもやりたくないことも  
たくさんあつて  
時間が足りないくらい。  
太陽光に負けない人工エネルギー。



## 問題や矛盾への 直視を訴える人

日本三大砂丘の一つ、雄大な吹上浜を誇る吹上町で、公害問題に取り組み、知事・関係部局を相手に議論を吹っつけてきた熱血漢がいると聞いた。吹上町といえば美しい海とウミガメの産卵で知られ、環境保全に力を入れている町というイメージがあるが、それは表面上のことなのだろうか？

さて、その闘う男とは穂園幸郎さん。現役時代から鹿児島教職員組合に籍をおくジャーナリストとして、教育問題とともに環境問題、とくに臨海工業地帯の環境汚染や食品添加物問題などを組合の機関紙に書いてきた。始良からこの吹上町に移ってきたのは8年前。以来ずっと地元の産廃処理場をめぐるさまざまな問題を追いかけている。

穂園さんによれば、その産廃処理場での不法投棄が元で地下水が汚染され、周囲の杉林も枯れてきているという話。「工場の廃液などの投棄が原因で、赤い化合物が混じる水からは有害物質が検出されているんですよ。住民が調査を行い、検査機関が分析結果を報告しましたが、責任の所在がはっきりしないうつたんです。まさにクサイものにフタですよ」

穂園さんはやり場のない怒りに首を振る。

裁判に勝っても負けても汚染されて

# SLOW LIFE STAGE

08

## 吹上の家

穂園幸郎さん、律子さん



いる現状に変わりはない。その事実を監視し、写真を撮り、証拠をそろえて、地道に行政へ事態の直視と積極的な浄化を呼びかけるという毎日。その活動記録ファイルはすでに何十冊にもなっている。

何事も根っこまで掘り下げないと気が済まない性格をつくったのは、戦中、戦後に味わった数々の矛盾だ。

1944年、中学2年生で父親を亡くした穂園さんは学費の支払いがままならなくなり、陸軍少年飛行兵学校に入学することにした。配属は操縦科。しかし、すでに乗るべき飛行機もなく、翌年、敗戦を告げる玉音放送を聞いたのは、連合国軍の上陸に備え「爆弾を抱いて戦車に突っ込む」訓練をしていた別府の演習場のことだった。

「ラジオは雑音が多くて全然聞き取れなかったんです。それで、ソ連への宣戦布告だろう、と語り合いながら徹夜で大分の学校まで歩いて帰り、翌朝はじめて日本が負けたのを知りました。でもその時は『まだ神風は吹いてないじゃないか!』と叫んだくらい軍国少年でしたよ」と穂園さん。

しかし、奨学金をもらって中学に戻ってみても、陸軍将校でもあり歓呼の声で少年飛行隊に送ってくれた教師たちから、「オマエたち殺人軍人の卵はけしからん」とののしられるばかり。

「悔しかったですね。でもその反発が生きていくエネルギーになりました。



それで進学を決意したんです。日本にはまともな教育が必要だ、と。政府の方針に忠実に従わせるための教育はもういい、と思いました」

青年師範学校を卒業し、目標どおり小学校の教師となって9年、運悪く結婚を思い、現場を退いて鹿児島県教職員組合の本部執行委員になった。そこでの仕事が今の穂園さんの基盤を築いたのだ。

教職員組合の機関紙ではさまざまな問題を取り上げた。勤務評定や管理職制度、学力テスト問題など、教育行政による支配が強まり始めたころには、教育が子どもから離れていくことに危惧を持った。

「当時はまだ親も教師も一緒になって教育に当たろうという考えはなかったんです。教育について自由に話し合える雰囲気をつくろう、というのが私たちの第一の課題でした。日の丸問題にしても、靖国問題にしても、根本のところはどうなんだ、と。諸外国に与えた数々の苦しみはどう反省するのか、沖縄は……と、声を大にして言いたい」

身近にある問題の根本を探る姿勢は今日まで変わらない。例えば太陽熱利用の住宅に対する国の補助金。

「この家の建築完了直前、ソーラーシステムに補助金を出すなんて大きな新聞広告が出ましたが、実際は次期予算確保が目的だったため、結局その年度だけの話ですよ。この家はずっと



88ページ・いつも山を水を畑を生物をみつめつづける穂園さん。  
自然にあふれた景色のよりに見えるが、汚染は静かに環境をもしぼんでいる。



上・右・産廃処理場の不法投棄による地下水汚染を定期的に観測し続けている穂園さん。足元には赤い化合物が滲じ出る水たまりがある。下・2階はおびただしいほどの資料があふれる書斎。環境問題を中心に、ありとあらゆる分野の書物が山と積まれている。91ページ・「本報は知事とのケンカで」と笑う穂園さん。毎日午後3時以降は「帰と格闘する」そうだ。全身全霊で戦う人である。



CO<sub>2</sub>の排出を抑制し続けているというの  
に。だいたい国の予算なんて、本当に  
国民の生活をよりよゝするたためにある  
とは思えない。日本の環境行政は本当  
に真面目にやっつけていきよるのか！と  
手厳しい。

## インターネットを駆使、 畑も家も実験と検証の場

「でも、そんなことばかり考えてると頭痛くなるから、野菜つくりに精を出しているわけですよ」

穂園さんはふと表情を和らげると声  
を上げて笑った。

広い敷地を見渡せば、隅から隅まで  
まんべんなく野菜や果実が植えられ雑  
草も茂り、大気中のCO<sub>2</sub>を取り込んで浄  
化中。まるで菜園の中に暮らしている  
ようだ。環境問題↓食品添加物の問題

↓無農薬野菜という構図があるので、  
ふつうの家庭菜園やガーデニングを業  
しむ日曜ファーマーとはちよつと違う。  
初段を抜いて初酢をつくり、虫除けに  
使ってみるとか、ヤーコンにオリゴ糖

が多く含まれると聞いて栽培に挑戦し  
てみるとか、インターネットで集めた  
情報を駆使して「実験と検証を行って  
いる」と言っている。

そして、その菜園の脇には「原発な  
しても生きられる時代を目指して」太  
陽光発電のパネルまで設置されてい  
る！

「自分でできることはすべて自分で」  
がモットー。野菜だけじゃなくこつち  
も穂園さんの手作りだ。以前の家では、  
床下の空気を乾燥させて床の温度を上

げようと、太陽光発電を使って扇風機を回していたのだぞ。それは肺の具合のよくない奥さまのために考えたことだった。

シンケンの家に着目したのも、自然の力を活用する環境負荷の少ない住宅であるという点だったが、特に太陽エネルギーを利用して屋内気候を調節するソーラーシステムが気に入った。

「この家を建ててからは冬も夏もまったく快適です。床下の空気も自然に循

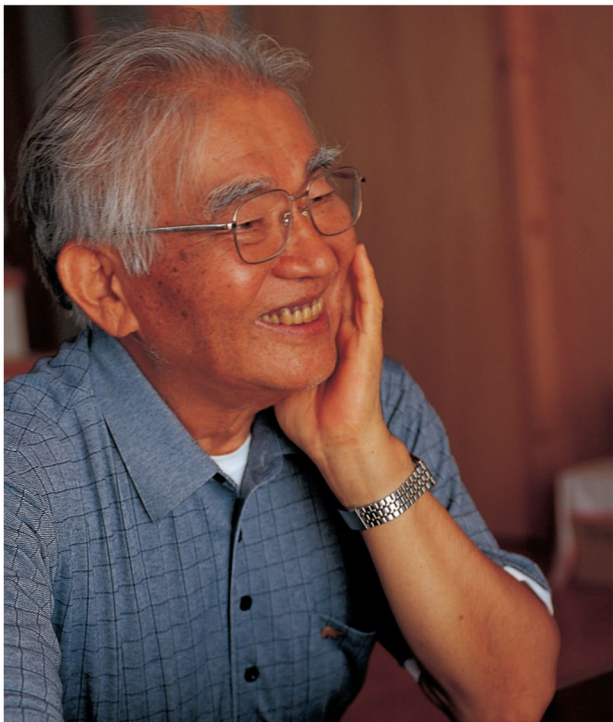
環しますから、これまで床下扇風機に使っていた電力は売っているんです。

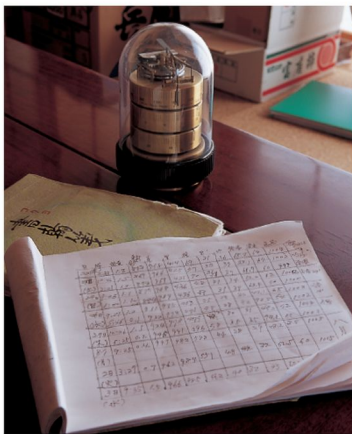
全国の学校はじめ行政機関の建物に、太陽光パネルを設置したらいいんですよ。鹿児島にはさんと降り注ぐ太陽がある。それをもっと利用するべきです」

夫人の律子さんは湿度が高くなると呼吸が苦しくなってしまうそうだが、以前の家では月に2、3日は必ず寝込んでいたのが、シンケンの家に住むよ

うになつてから寝込むこともなくなり、風邪もひかなくなつたという。

「足元が暖かいのと、乾燥しているというのがいいですね。それに風通しがとてもいい」と律子さん。実は毎日、気温、湿度、気圧を計つて大学ノートに表をつくり記録していた。体調管理に役立てようということでもあるが、1年365日欠かさず朝晩計測するというのは並大抵のことじゃない。とにかく夫婦揃つて勉強家なのである。





**物事の根本を常に考えること。  
探求心、好奇心を忘れずに日々を過ごすこと。  
そして、自分の生き方に信念を持つこと。**

右・結核を患って右の肺を失った律子さんだが、この家に住んで寝込むことがなくなった。  
左上・山の調査に出かける穂圃さんのいでたち。下刈り用の鎌とカメラは必需品。  
左下・以前律子さんが朝晩2回記録することを日課とした、気温、湿度、気圧のデータ。93ページ・土壌汚染で枯れてしまった杉。



## 音楽CDをプログラムし、 囲碁ソフトで遊ぶ

屋根裏の仕事部屋にはおびただしい量の書籍と資料が山積みになっている。ワープロからパソコンに切り替えたのはなんと25年も前のこと。穂園さんは毎日、朝日新聞の天声人語をスキャンしてワードに起こし、歴史、政治、環境問題、とテーマ別にファイリングしていく。そして午後は庭先の畑で農業の研究。今は「コンバニオンプランツ」のめり込みつつある。

研究の成果は庭を見れば一目瞭然。

桃、リンゴ、ナツメ、梨、キウイ、キンカン、夏みかん、だいたい、カボス、ブルーベリー、イチジク、桜、梅、桑、ボンタン、パパイヤ……（ああもうメモが追いつかない）などが美っていて、まるで八百屋の店先のようにた

「勉強することもやりたいこともたくさんあって、時間が足りないくらい。楽譜から音を拾ってプログラムミングして音楽CDをつくったりもするし、囲碁ソフトも充実してますからね。私の場合、晴耕雨読ならぬ『晴耕雨碁』です（笑）」

世の常識では「できすぎる難しいこと

はやめにしてゆつくりしたらどうですか」という年齢だが、目の前に座っている穂園さんを見てみると、「いくつになったか？ そんなことあとうでもよろしい！」という気持ちになってくる。

今が充実していれば、今がいちばんの時ののだ。生き方と暮らしのポリシーがびつたり重なる人というのは説得力がある。そして周囲にエネルギーを与えてくれる。太陽光エネルギーならぬヒトエネルギーの発散である。活を入れてもらいたい人は、吹上町に行くべし！





# DATA

## 08 吹上の家 (穂園邸)

所在地 鹿児島県日置市吹上町

敷地面積 493.61m<sup>2</sup>

延床面積 134.00m<sup>2</sup> (1階70.00m<sup>2</sup> 2階64.00m<sup>2</sup>)

家族構成 夫婦

竣工 1999年3月

主な外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板横葺き

外壁 杉縦目板横張り

建具 ローエン

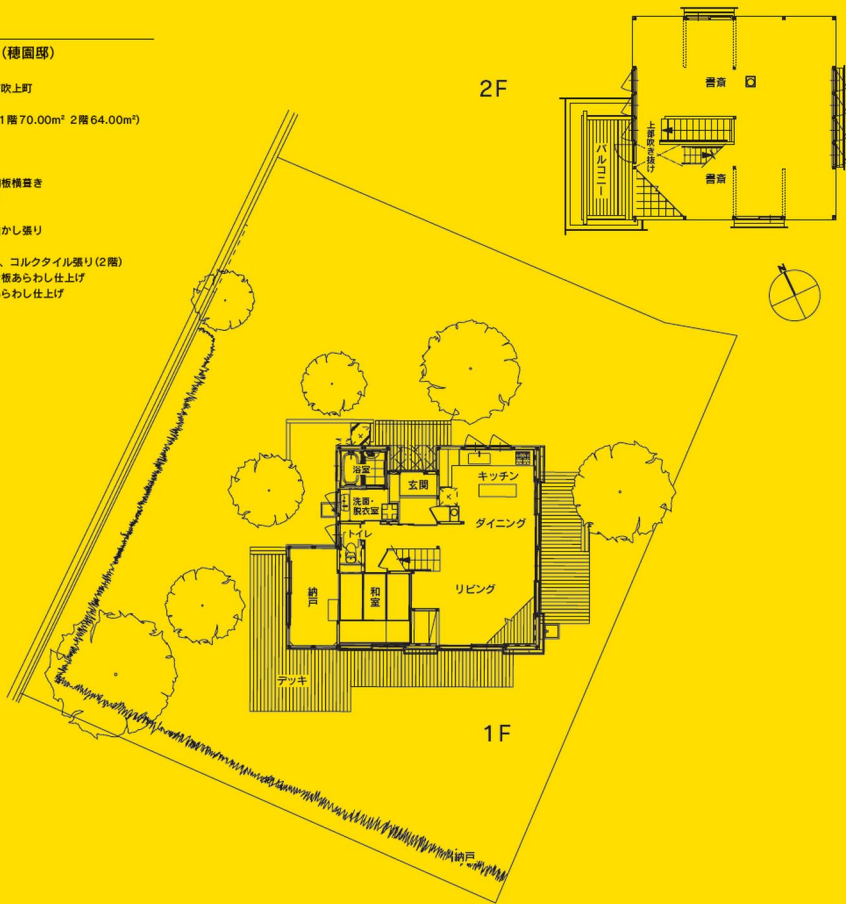
テック床 米ヒバ目透かし張り

主な内部仕上げ

床 赤松横張り(1階)、コルクタイル張り(2階)

壁 構造用スプルス合板あらし仕上げ

天井 構造用パネルあらし仕上げ



何が大事で何が不要か、  
掃除にも人生にも、家にも  
共通すること。  
行き届いた手入れに  
苔は青々と育つ。



「新築したら家が小さく  
なりました」と笑う住職

垂水市牛根の海沿いの国道から山の  
方に入ってしばらくいくと、保育園が  
見えてきた。一段高いところからそれを見  
守るように立つのが浄土真宗本願寺  
派のお寺、南陽山西宝寺。

境内を進んでいくと巨の穴を埋め尽  
くすようなセミの鳴き声に包まれて、こ  
ちらも自然に会話の音が大きくなって  
いく。目指すお宅は本堂の隣の竹林の  
奥。路地の向こうにほんの少し覗く玄  
間とどつしりとした無垢板のドアを見  
ると、山中の隠れ宿か、知る人ぞ知る  
秘密の名店か、といった風情である。

西宝寺がこの場所に建立されたのは  
明治23年。大正3年には桜島の大噴火  
で大きな被害を受け苦難の時代が続い  
たが、昭和18年、第二次世界大戦のま  
っただ中に、天野さんのお父様である  
第三代住職によって現在の本堂が再建  
された。

「その時に余った材木で建てたのが前  
の家でした。広さこそ130坪もあり  
ましたが、物資の乏しい頃の建物です  
から傷みもひどく、寒くて暗くて」と天  
野さん。

新築を思い立った頃、展示場でちょ  
うと出来たばかりのシンケンモデルハ  
ウス「杉の家」を見て、しっとりと落ち  
着いた雰囲気惚れ込んでしまったの  
だそう。

渡り廊下で本堂と結ばれた1階奥は、

# SLOW LIFE STAGE

09

## 垂水の家

天野信道さん、睦美さん

お寺と生活の場の2つの輪がちよつと重なるころ。座敷は法要や年回の時の講師部屋、あるいはお坊さんたちの懇談の場として必要不可欠のだが、引き戸でキッチンやファミリールームと仕切れば、池に張り出す居間と北の座敷が一続きになって、南北の庭を見渡せる開放的なもてなしの場となるよう工夫されている。

「前の家時から、この池と回り廊下が入っていたんです。社長もそれを生かして庭を思いきり広くつくってくださったので、新築したら家が小さくなりました」

ほつほつと、と笑うに任職。家族はもう慣れたが、他のお寺のお坊さんたちは口々に「小さい」と言うらしい。たしかに建て替えたらふつうは大きく立派になるものだが、この家の場合は50坪あまりも縮小されてしまったのだから、以前の家を知る人たちが不思議に思うのも無理はない。

「でも、十分用は足りていますし、皆さんそうは言っても結構くつろいでいらしゃる。もともと庶民感覚なんですよ、浄土真宗本願寺派は」と天野さん。浄土真宗は禅宗のように座禅を組んだり厳しい修行をすることはない。教え

を上から説くのではなく、住職も門徒もいっしょにお勤めをし、一体となって教えを進めていくという姿勢を持っている。

「研究会を開いたりするのでなく、お葬式やご法事の際に、後に残った皆さんに、仏様のみ教えを語ります。人間の無常観、罪悪感、人の死とは何か。それが亡き方への供養にもなるんじゃないか、と。仏教婦人会というのもありますけれど、みんなで話しながら暮らしの中で教えを広めていくのが基本です。毎日コツコツと、地道に。大きいことはあんまりしませんけどね(笑)」





竹林に囲まれるように立つ家。この庭の美しさを生かしたために「家が小さくなった」わけだ。奥にお寺に通じる渡り廊下がある。



「この昔は幸せです」と  
言われ、うれしかった

二人の兄と一人の姉を持つ三男坊だった天野さん。子どもの頃から長兄と父に「オマエは坊さんしかなれんから」と言われて育ち、この寺を継ぐことになった。教員になるか、公務員になるか、社会福祉系に進むか、と思ったこともあったが、結局はどれも人の役に立ちたいという心。

「やっぱり親は子の素質をちゃんと見ていたんだなあ、と今になって思います。父に感謝していますよ。坊さんになって本当によかった」、そう天野さんは言う。

奥さまの陸美さんもお寺の娘として育ち、お寺に嫁いだ根っからの「坊守」さん。文字通り、お坊さんのお守りと寺のお守り、そして保育園の責任者として、主婦として、休みなしに裏方に徹する毎日である。そんな陸美さんを「うちの坊守さんはお掃除大好き人間なんですよ」と住職は讃える。掃除をして、寺に来られる方を気持ちよく迎えるというのが、お寺でもっとも大事なことだ。

やっぱり清潔にするというのは心の修養にもいいんでしょうか。そう尋ねると、「そうですね。私は行き話まると掃除をします。何が大事で何が不要か、という取捨選択は、掃除にも人生にも共通していると思います」、陸美さんはにこやかにそう言った。



100ページ・北側の座敷の引き戸を開けると、南北の庭に面した部屋が一体になる。右2点・本堂への廻り廊下から見ると、池に張り出すように縁が回っているのがわかる。軒先に水面の揺らめきが見えるのが美しい。左・ガラス戸をすべて引き込むと縁が家の中まで入ってきそうな雰囲気だ。インテリア好きの母娘は、東京に出かけては家具や雑貨を見て歩く。「でも、東京のホテルよりも家の方がいい」と娘の摩弥さん。



聞けば、お釈迦様の教えを伝えるお話しに掃除の話があるそう。お釈迦様に掃除を命じられたある弟子が、毎日素直に「塵をほらい、垢を除かん。塵をほらい、垢を除かん」と唱えながら一生懸命に掃除をしているうち、「もしかしららお釈迦さまは『自分の心の垢を除きなさい』とおっしゃったのではないかと気づいた、という話。

睦美さんが気を配るのは本堂や家の掃除だけでなく、庭の手入れも含まれる。なんといつてもこの面積、夏の日照りの中で苔を青々と保つのは大変な苦労に違いない。

「でも、庭仕事は楽しいですよ。せっかく家を建てたけれど、家の中にいるよりも地面を這いつくばっている時間の方が長いくらい(笑)。家も庭も皆さんが心を込めてつくってくださいものですから、引き受けた以上は預かっている気持ちで。庭師の方に『この苔は幸せです』って言われた時はうれしかったですね」

もちろん、お寺の保育園でも掃除は大事な教育の一部だ。園児たちは毎週月曜日の朝には必ず「本堂にお参りして、お勤めの後に拭き掃除をする。

「仏様から教えをいただいたお礼としてお掃除をしない、と言っんです。雑巾を絞って廊下を拭く、ただそれだけ。理屈じゃなくて小さい頃から身についたものというの、大きくなってから役に立つんですよ」



上・103ページ下・色とりどりのガラスシェードが輝く夕暮れ時の居間。モダンな家具と和の空間がしっかりと馴染んでいる。  
右下2点・どっしりとした無垢板の両開きドア。期待をふくらませて中に入ると、石を敷いた玄関ホール。アプローチから玄関まで一貫して品格が漂っているのがよい。  
103ページ上・玄関ホールの脇の居間は、奥の引き戸で仕切れば家族用の空間になる。







## シンケンの現場も 掃除が行き届いていた

それにしても、新築工事の半年間、現場の掃除が行き届いていたのには感心した、と陸美さんは言う。

「他の家の工事現場が汚かったりするのを見ると、シンケンにはこんなことはなかった、って思っんです。仕事を美しくするというのはやっぱり基本なんです」

家づくりの様子を毎日楽しみに見守るうちに、「現場の方がこんなに一生懸命建ててくださるのだから大事にしない

いと」思うようになったそう。

丹誠込めて手入れされた庭には山の緑や湧き水がそのまま生かされ、池の水面の揺らめきが深い軒天に反射する。風が通り抜け、家の中をトンボがついと横切っていく。

「エアコンなしで十分ですよ。冬は南の居間でひなたほっこ、夏の夜は座敷の廊下に娘と布団を持ってきて寝たりして。今日ほどここで食事をしようか、と、本当に飽きない家です。それに、何を置いても似合う家です。北欧家具もイタリアンモタンの小物も日本の骨董も。季節ごとにインテリアを変えていける楽し

みがあるのがいいですね。家具や雑貨が大好きな陸美さんと娘の摩紗さんは顔を見合わせて微笑んだ。

桜島の向こうに日が落ちて、今日もおだやかに空と海が赤く染まる。昼間はひそやかに佇む家であるが、色とりどりのガラス照明が灯ると、竹林の奥で居間全体が小さな宝石箱のようにきらめいた。

周囲と一体となり、目立たず地味であることを良しとするご住職の生き方と、日々の繰り返しの中で豊かに美る家族の暮らし。その両方の姿を見た思

**華美にならないように、渋く地味であるように。  
周囲に溶け込むことを望む住職の生き方を  
そのまま建物に反映させて。**



# DATA

## 09 垂水の家 (天野邸)

所在地 鹿児島県垂水市二川581

敷地面積 1728.92㎡

延床面積 269.50㎡ (1階 189.50㎡ 2階 80.00㎡)

家族構成 夫婦、娘

竣工 2002年6月

主な外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板横巻き

外壁 杉縦目横押さえ張り

建具 オリジナル木製サッシ、マーヴイン(アルミクラッド)

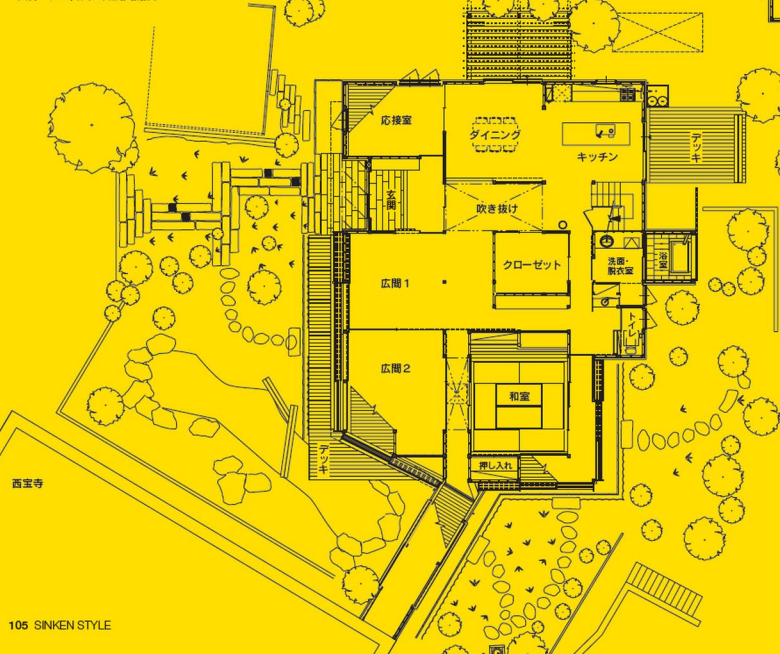
アツキ床 米ヒバ目透かし張り

主な内部仕上げ

床 吉野杉板張り

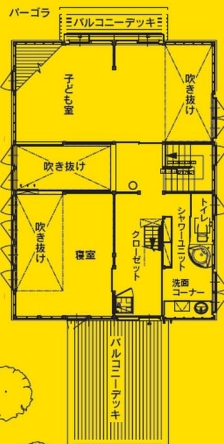
壁 吉野杉板張り、プラスターボード張り

天井 Jパネル、津江杉板張り



西宝寺

2F



1F

医師が、多忙な日々を振り返り、  
理想の老後を考えた。

郷土の恵み、  
伝統や誇りを大事にしたながら  
ゆつくりと過ごす空間。



## 30年間、医師として 老人を診てきた

湧水町という名前そのままに、美しい泉のある町。「日本名水百選」に選ばれている丸池は、川内川水系の丸池川の起点である。池をのぞき込むと恐ろしいほどの透明度で、水中というより空中に魚が浮いているようだ。

「私はこの栗野の隣の吉松の生まれなんです。自家の近くにも熊野湧水があります。水には悪い入れがあるんですよ」と平島さん。それで美しく豊富な水の湧くこの地に平島クリニックを開いたというわけだ。

平島先生の専門は胃腸外科。だから加治木町のご自宅の庭には、「胃と腸の川」と名付けられたせらぎが、口から肛門まで（！）ちゃんつくられている。「溜まって動かない池じゃなくて、流れていることが重要」なのだそうだ。昨年、クリニックの敷地内に完成したお年寄りのための集会所「湧泉」にも、さらさらと心地よい音を立てて水が流れている。

「生物は海から生まれ、赤ん坊は羊水の中に浮かんでいるんですからね。身近に水の流れがあると人は安らぎを感じるし、健康にもいいんじゃないか、と。でも、ウチの庭の川にはちょっと胃（座敷前の池）のところに大きなガン（癌）があるんですよ。はっはっは！」

クリニックを開業して以来30年、毎日診察と手術を精力的にこなしてきた

# SLOW LIFE STAGE

10

「湧泉」ひらしまクリニック

平島忠久さん、孝子さん





平島先生。6年前からはデイケア棟も開設し、地域のお年寄りの健康管理やリフレッシュ、社会的交流に力を入れている。

「警察医もしているんですよ。その関係で、独居老人の孤独死をたくさん見てきました。やりきれない思いです」

最近が高齢化が進んで、クリニックに来る患者さんもお年寄りが多くなってきた。当然自分も年を取っていきま

す。それで、これから医者として自分は何をすべきだろうかと考えた末、難しい手術をすることよりも、老人保健の方

向へだんだんシフトしていったほうがい

上・右2点・加治木町の住まいは、吹き抜けの大空間に薪ストーブが据えられている。またゆったりとしたお風呂は、時間を忘れてしまいそうだ。玄関までのアプローチには、座敷の方からさらさらと「胃と腸の川」が流れてきている。

109ページ・病院の右手に立つ黒つぼい建物が「湧泉」。横側に乗ると、田んぼの向こうにJR肥薩線の「はやとの風」が走るのが見える。



いんじゃないかと思うようになったんです。

今、デイケアにやってくるお年寄りは日に20人くらい。平日の昼間、ホールでゲームをしたり、体操したり絵を描いたり、さまざまなメニューを楽しみながら時を過ごしている。

お昼ご飯の内容は個人の健康状態によって少しずつ制約があるが、今日は皆が楽しみにしている月に一度の「駅の日」。足腰が悪くて実際に旅行に行けなくても、旅気分を味わって欲しいというこの特な企画は、なかなか好評のようである。

『じいちゃんってへる方は元気のいい、出てきたがりやさん』ばかりです。でも、こういうにぎやかな場が苦手な人

は、どうしても引きこもりがちになってしまっんですね。そういう方をどうにか外に引っ張り出したい」

そう平島先生は言う。先生によれば、こうして歌やゲームに参加できる人、つまり社交性の高い人は元気で痴呆になりにくい。でも、現役時代に高度な頭脳労働に従事していて、リタイア後うまく周囲と馴染めない人は、身体的にも精神的にも衰えが早いのだそうだ。

『そういう人が孤独死してしまう。プライドの高い人、真面目な人が多い。それで後から発見されて検死に立ち会うのが私、ということになる』

そこで平島さんが考えたのが、静かに自由な時間を過ごしたい人がやってくる場所づくり。本を読んでもいい、パソコンで何かしていてもいい。とにかく人前に出ること、それが大切なのだと平島先生。





庭は平島さんの指示でつくられている。「緑  
側で風に吹かれて、せせらぎの音、汽車の音  
を聞く。子どもの頃に戻れるでしょうか？」  
111ページ 畳のスペースは少人数のグルー  
プになったり独りで過ごしたい時のために、  
中央の欄でなんとなく仕切ることができる。

## 記憶にある家の 原風景に近いシンケンの家

この「湧泉」計画の前に、平島さん  
は自宅を新築している。もちろんこちら  
もシンケンの家だ。

「最初は床暖房に惹かれてモデルハウ  
スを見に行ったんです」と夫人の孝子  
さんは話す。

当時は鹿児島市内のマンションに住  
んでいたが、通勤が負担になったのと、  
上のお子さんが独立したのをきっかけ  
に新築を考え始めたのだという。

「でも、夢中で子育てしている時期と  
一段落ついた時期とでは、住まいに対  
しての考え方も違ってきますし、趣味  
もだんだん変わってきますよね。それで  
落ち着いてから建てよう決めました」

若い頃は洋風の家には憧れていた時期  
もあった。フレキシブルな和風の家も好  
きたけれど、なかなかイメージに合うも  
のがない。そうやって数年間検討を続  
けるうちに、シンケンのモデルハウス「杉  
の家」ができたのを知った。

「前のフォルクスのときの離れも気に入  
っていたんですけど、『杉の家』はそ  
れにも増して素晴らしいかった。もう、こ  
れで行こう！ ってすぐに決めました。  
庭と建物の一体感がいいし、広縁があ  
つて、軒が深くて、のんびり……。子  
どもの頃に見ていた懐かしい情景がパ  
ーッと蘇りました。ああ、こうだったな  
あ、つて。いままで言葉にできなかった  
が、求めていたものが凝縮されているの





を感じました。

孝子さんは5年前の感動をつい昨日のこのように目を輝かせて語る。

ぜんそくの持病があるので、足元から自然な暖かさが得られるソーラーシステムがあることも、木をふんだんに使っているので湿度が少ないことも重要なポイントだった。しかしそれよりもまず心に響いたのは夫妻の記憶の中にあつた家の原風景に近い、ということだったらしい。

住む場所として加治木<sup>カヂキ</sup>という町を選んだのもそうした理由なのだろう。ここは加治木烏津家の下に栄えた武士の町であり、今も伝統的な文化の継承に力を入れている。

いまでも「郷中教育」といって、小学生から20代後半の若者までが共に活動し、先輩から後輩へ薩摩の教育を伝えていく風習が残っているという。平島さんの三男、小学6年生の寛行君もその一員だ。彼は地元「精矛神社」にある「青雲舎（二道場）」で行われる子どものための武道会に参加して、薩摩野太刀示顯流の稽古を受けている。

「この町は、古いものと新しいもののバランスが、いい感じで保たれている気がするんですよ」

そう孝子さんは言った。時代に即した新しい思考を持ちながら、自分たちの中にあるルーツや誇り、そういった核となるものを大事にするというのは、平島夫妻の生き方全般を貫く方向性なのだろう。



予算とルールを決めて終わってしまう福祉ではなく、  
まず場所をつくるということが大切。  
自然にわき上がる会話と助け合いを目指したい。



「時間に追われていたこれまでと違って、人間らしい生活をしたい、と思っていました。それで光と風に加えて、水と土がある家を、とお願いました。地元の木を使ったかったので、材木屋まで行って実際に木から見せてもらいました。家を建てる地域と同じ気候の中で育った木で建てるのがいちばん。うちは大口の杉ですから、吉野杉のモデルハウスよりも長持ちするはずですよ。」  
平島先生はそう言ってお胸を張る。  
庭には、実家にあつた石臼を、踏<sup>は</sup>に活用した。お風呂の打たせ湯の下にも、実家から持ってきた石風呂を設置してある。

「この家では時間がゆっくり流れている気がします。季節によって日の入る角度や風の冷たさが変わっていくのがよくわかります。友達の家遊びに行くと、モダンで洋風な家も素敵なんですけれど、帰ってくるとホッとするんですよ（笑）。最近、便利だけが家じゃない、と思うようになりました」

一度住んだらシンケンの上よさは誰もが納得するはず、と平島先生。

「この冬の暖かさはお年寄りに最適だと思います。自分たちだけ住むのはもったいない」

そんなわけで、自宅の完成後まもなく「湧泉」の計画が始まったのだ。

112ページ右・加治木の自宅近くにある精  
矛神社で、薩摩野太刀示麗流の稽古をする寛  
行君。小さくとも凛々しい剣士だ。  
左・実家にあった石臼を庭の隅にしてある。  
上・下・座敷の奥にある囲炉裏の間。開放的  
な座敷とは対照的に、こちらは天井も低く抑  
えられ、落ちついて籠もれる雰囲気。じっく  
り話し合うのに最適だ。自在鉤は骨董好きの  
平島先生が見つけてきたもの。







火鉢を囲んで「懐かしいねえ」とおはあちゃんたち。お茶を淹れたり、簡単な食事をつくれるキッチンもある。「世話をせずに、自然に発生する会話」を平島先生は期待している。



右・「湧泉」の2階は平島先生の書斎。吹き抜けから1階の縁側が見える。

左・北側の庭を静かに眺める平島先生。灯籠は、加治木町のある武家屋敷の庭にあつたものをもらってきたものだそうだ。

117ページ・クリニック側から見た「湧泉」の外観。6年前から庭木の準備をしていた。



老人だけでなく、その環境を  
考える人も集う施設

医療用の施設という点、空間にしても設備にしても、どうしても機能重視の味気ないものになりがちだ。汚れても掃除しやすいリノリュームの床、転んでも痛くないマット、立ったり座ったりが楽なテーブルと椅子が置かれたホール。真っ白で明るく清潔で、広くて平らな室内。

たしかにその方が合理的かもしれない。でも本当にそれだけでいいのだろうか。人が心の底から安らぎを感じる空間というのは、どうあるべきなのだろうか。そんな平島先生の思いから「湧泉」の設計は進められた。

「畳があつて、床があつて、庭を眺められる縁側があつて、小さな火鉢を囲んで……。みんな喜んでくれていると思いますよ。クリニックに来たときに待合室として使ってもらってもいい。なんの制約もなく、静かに、家にいるような気持ちになれる場所をつくりたかつたんです」

2階は平島先生のプライベートオフィス。1階はお年寄りたちに開放する広々とした居間の他に、自由に使えるミニキッチン、囲炉裏いりコーナーまで用意されている。囲炉裏の間は、お年寄りだけではなく、行政関係の人や民生委員といった人たちのミーティングスペースにも活用してもらいたい、と平島先生は考えている。老人を取り巻く環境



を整備するには、現状を伝え、話し合  
つて問題を解決していく必要がある。そ  
れには役所の会議室よりも、こういう  
場所の方がずっといい知恵が出るに違  
いない。

完成披露の日、お年寄りたちは、火  
鉢を囲む人、座卓のまわりでおしゃべ  
りする人、庭を眺める人、といろんな輪  
をつくって思い思いにくつろいでいた。  
広い居間の真ん中には場を分けるぎつ  
かけつくりのために衛立状の襖が入れ  
られていて、必要に応じてゆるやかに仕  
切ることもできる。

その姿をにこにこ見守っていた平  
島先生。「これは自分が70、80になつた  
ときの理想の暮らしなんです」とつぶや  
いた。

一人で静かというのではなく、田  
舎裏のまわりに人を呼んでワイワイ楽  
しく過ごしたい。病院の規模を徐々に  
小さくして、入院患者をなくして、外  
来だけに限り、のんびりおしゃべりをし  
ながら時間をかけて診療していきたい。

「今まで忙しくしすぎたんですよ。患  
者さんとゆっくり話すヒマもない。60歳  
まで続けていければいいと思ってきまし  
たけれど、この湧泉を建てることでぎ  
て、使命を果たせた気がしています。あ  
とはここを充実させていくことを考えて  
いきたいと思っています」





# DATA

## 10 ひらしまクリニック「湧泉」

所在地 鹿児島県姶良郡湧水町米永

敷地面積 597.62㎡

延床面積 164.04㎡ (1階86.00㎡ 2階52.00㎡ ガレージ26.04㎡)

竣工 2005年12月

主な外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板横置き

外壁 モルタル金網押さえの上 弾性ジョリパット吹き付け(1階)、杉下見板張り(2階)

建具 オリジナル木製サッシ、マーヴイン(インテグリティ、アルミクラッド)

デッキ床 杉目透かし張り

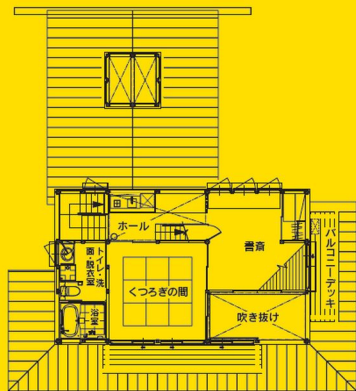
主な内部仕上げ

床 磨松板張り

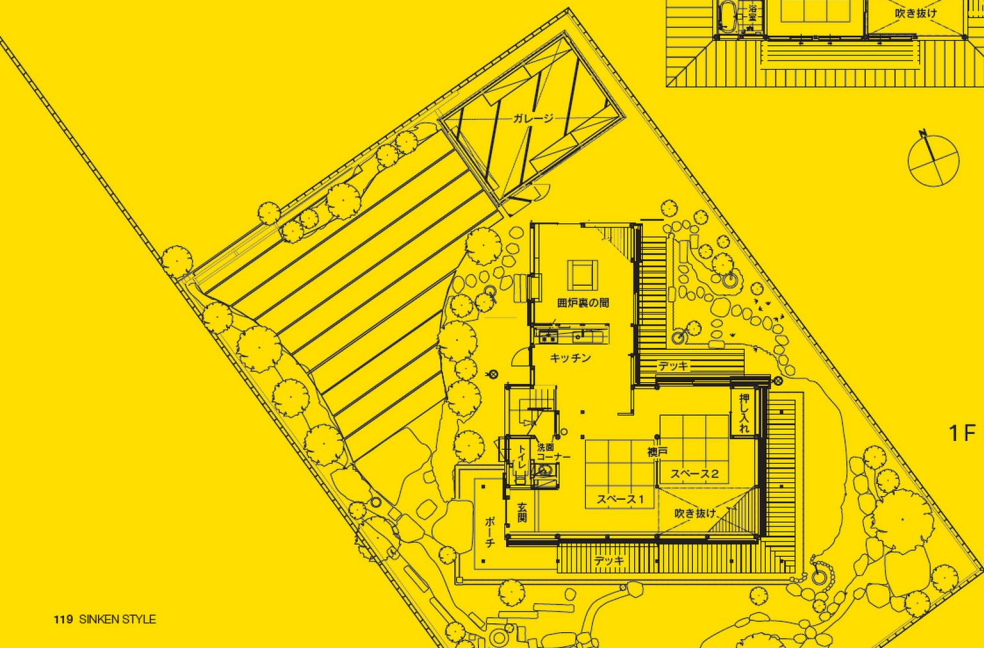
壁 モイス張り

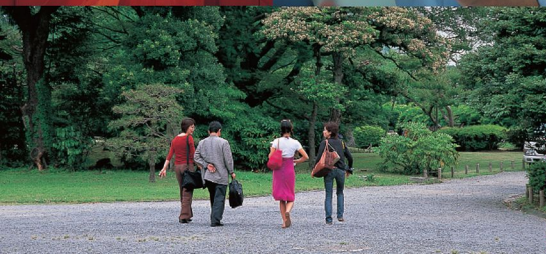
天井 杉構造用パネルあらし仕上げ

2F



1F





# ロングライフな 快適住宅への 第4章 試み





女優として活躍する高樹沙耶さん。  
一方で、農と土地を中心に持続可能(サステイナブル)な暮らしを目指した  
ハイマカルチャーを実践するナチュラリストでもある。  
オーストラリアで初めて体験したドルフィンセラピーを、数年を過ごしたハワイ島で修めた。  
そんな体験を日本で活かそうと、高樹さんは帰国後、  
千葉の海を見晴らす土地を求めて家を建てようと思った。  
イメージする家づくりがすすまないと感じていたとき、人の紹介でシンケンの家に出会う。  
自然と共生する生活を望む高樹さんは、どのような魅力を感じ、  
シンケンの家づくりを選んだのだろうか。

女優・ナチュラリスト

# 高樹沙耶さん

昔のいいものは取り入れ、現代の知  
恵も活かして快適に暮らしたい。そ  
の昔と現代の割合が、ちょうどいい  
のがシンケンの家だと思っています。



## たかぎ・さや

女優。静岡県浜松市出身。1983年、ヘラルド映画『沙耶のいる遊園地』で主演デビュー後、映画、舞台、テレビを中心に活躍。趣味の写真や料理のほか、地唄舞（名取）、船舶（一般船舶免許）、スキューバダイビング（NAUIインストラクター）など多方面に活動を広げる。2002年にはフリーダイビングの大会「ジャックマイヨール・メモリアル・インターナショナル・コンペティション」日本大会で女子1位（日本代表1位）、世界大会で日本女子チーム2位、女子個人4位の成績を収めた。

## エゴとエゴのバランスがとれた生活

——高樹さんが自然との共生を意識するようになったきっかけって何だったんですか？

高樹●私たちは20代がバブルの時期と重なっていて、物質的な豊かさ⇨幸せであるという価値観を雑誌やテレビで植えつけられてきた世代だと思うんで。私はたまたまその「ちよっ」とい生活」を早いうちに手に入れることができちゃったわけですが、手にしてみると何か違う気がして。20代後半、その疑問がふくらみきつたところで、番組の仕

事でオーロラを見に北欧に出かけたんです。真冬のフィンランドはマイナス30度。そういう環境の中に生きる人が、自然に対しておごり高ぶっていないのに感じました。街に、ビルやコンビニ、自販機といった人間のエゴがどこにもない。彼らや環境を見てみると、それこそが当たり前で、「逆に日本がおかしいんだな」って、不安や疑問の根本にあるものがわかった気がしたんです。

その1年後に、今度は「イルカは人を癒せるか」というテレビの番組でオーストラリアに行きました。ドルフィンセラピーに接して自分の意識が変わったし、イルカと話ができるアポリジニと会



撮影協力・浜倉宮恩賜公園

い、その生き方を見て、地球の先住民である彼らが地球で謙虚に生きるすべをよく知っているのに感心しました。そして、それが生き物として正しいんだ、と開眼しました。それがきっかけでドルフィンセラピーを仕事にしたいと思うようになったんです。同時にスキューバダイビングを始め、小型船舶免許も取りました。海のプロになると思って。

— ハワイに住むことを決めたのはその後ですか？

高樹●そうですね。船舶免許の勉強中にハワイに行く機会があって、行ってみたらオーストラリアよりも水温が高いので年中イルカと遊べるし、水の透明度も高い。ここに住むんだ！って決めました。直感で(笑)。そんな時に、翌年フリーダイビングのワールドカップが開かれると聞いたんです。それで、これに出れば海のプロであることが認められる、と思ってチャレンジしたら日本一になれてしまった。

— たった1年のトレーニングで？

高樹●そうですね。その前に、W杯に出るためには日本で優勝していないとダメなので、短期間日本に戻ってきたことがあったんですけど、日本の海が汚いことに驚きました。潜るのに恐怖感さえ覚えました。その時改めて感じたのは、陸で生きている自分たちの生活が全部海に反映されているんだ、という事です。こんなにも我々は汚れている。

— 山から海までみんなつながって

るのを私たちは忘れがちですよ。

高樹●フリーダイビングをしていて思うのは、空気や土や水は常に循環しているということ。地球上のみならず共有して、食物連鎖の循環の中で生きていることを思った時、ハワイで自分だけ幸せにしていられるわけがない、って気づきました。みんなが幸せになれば、本当の幸せはない。じゃあどういう生活スタイルがいちばんいいのだろうか、と考え出した時にバーマカルチャーに出会ったんです。

— バーマカルチャーというのは日本ではまだ馴染みがない言葉ですが。

高樹●バーマカルチャーというのは、昔の自給自足と、現代のテクノロジーのいいところを寄せ集めて、自分が望むライフスタイルをミックスしていく生き方です。オーストラリアには「コミュニティ」もあるんですけど、みんながこういう発想で暮らしたら地球は楽園になるだろう、と思いました。

## 「私が建てたい家」との 出合い

高樹●そんな折り、たまたまプライベートでいろいろありまして、とりあえずゆつくり考えるために日本に戻ることになったんです。これも神様の思召しだろうから(笑)、日本でバーマカルチャーをやりながらメッセージを発していく人になるう、って。それで、ハワイから戻ってきた2003年に千葉に土地を購入したんです。でも、それまでは何



かが用意されていたかのように、カードをめくると新たな道が開けてきたのに、日本に帰った途端に全然進まなくなってしまう。地元の仕事店をはじめ何人かの設計者と出会って、私のやりたいことを伝えるんですけど、私が建てたいのはデザインが素晴らしい別荘でもないし、テクノロジーや幾何学で自然の気呼び起こすような建物でもない。なかなかイメージじどおりの家づくりができな感じです。

——エコロジーハウスの本や雑誌は読みました？

高樹●本を読むと、コンクリートはつくっている時点で二酸化炭素を排出し、使えば大地を傷め、人間のやることで最悪なのかなあ、って思えてくる。そんな時に、東京のマンションに珪藻土を塗ったご縁で、『あたり前の家』がなぜつくれないのか？』という本が出るので協力して欲しいと言われて、本のスタッフに経緯を話しているうちに、「じゃ、高樹さんの家づくりを僕たちが手伝いましょう」というお話になったわけです。

——それでシンケンにたどり着いたと。高樹●そうなんです。高樹さんの望んでいる家を建てるのはこの人なんじゃないか、って。もうびったりでした。私は不健全とか、寡さを我慢しながら暮らす、古民家の生活には戻りたくなかったですね。昔のいいものを利用しながら快適に暮らしたい。その点、迫さんの建てられている家というのは、昔と現代

との割合がものすごく自分が望んでいるものだったんです。

——すぐに鹿児島に行っただけですか？

高樹●まず展示場に行って、その後何軒か見せていただきました。私、ハワイで家を買ったときも、本当は建てたくて自己流の図面を描いたりしていたんですよ。それが、お寺のように深い縁側があって、風を取り入れるために南北が大きく開けている木の家だったの、展示場でシンケンの家を見た時にあまりにもイメージそのまま驚きました。「ああ縁側、広い広い！ 窓、大きい大きい！」って(笑)。太陽を取り入れるために建物を斜めに振る話に到っては、私まさに探し求めているものだったので大喜び。

——ところで、迫さんはその時、依頼を受けるつもりだったんですか？

迫●いや……(笑)。とにかく土地を見るだけ、と白浜まで行っただけで、はじめて高樹さんとは思いました。でもせつかく高樹さんに縁があった土地だから、なんとかしたいと思いました。

高樹●私にとっては最高の土地なんです。南に何もなくて一日中海が見える。風が強いのを利用して風力発電なんかでもできるんじゃないか。それに音障々畑だったところなので、菜園をするには非常にいい土で、20年間使っていないから農薬もなくなっているはずだ、って。でもプロの目からすると、道路にも接していないし、畑だった山となると地崩れが起きるんじゃないかって、迫さ



シンケンで  
家を建てようと思っただけ  
Interview  
高樹沙耶

んは静かに「本当に住むんですか？」って言うんですよ。

迫●いちばん問題なのは現場の施工と監理なんです。それで、知り合いの工務店が千葉にいたので相談してみよう、と。

高樹●その小山さんという方に、「ここは岩盤でできていますよ」と聞いて、迫さんもようやく笑顔になって。それでもう、その日のうちにラフな図面を描いてくださったんです。

迫●山に抱かれて、海にテッキを張り出して宴会をしよう、月見をしよう、そういう家です。コンクリートの要塞をつくるのはイヤだったので、もし土砂が崩れた場合に身を守るだけのスペースを確保するため、コンクリートの土台をつくることにしました。

高樹●もう感動でしたわ。まったく根本から発想が違う。私は最初、敷地の入り口の借地の下に車を駐めて、丘の小径を下りトコトコ歩いて家まで上がればいい、って思っていたんですけど、迫さんが私の顔をじっと見て、「冬です。雨が降っています。東京を24時間さに出ました。買い物もいっぱいしてしまいました」って。その瞬間、ずぶ濡れになって歩く自分の姿が思い浮かんじゃって。

迫●この家のポイントにはセキユリテイなんです。車の中に乗り入れて、シャッターを開けてから家の中に入れるように。地階にはガレージの他に、農作物の保管場所、作業用スペースとしての土間のような場所を用意する予定です。高樹●さすがですよ。風の問題にっ

いても、生えている草の流れを見て、太陽と合わせて窓の位置を考えてくださったんですけど、雨側は戸を開け放して、家の中で海、みたいな感じにしたい、って言ったら、「風と潮で戸がきもいもので、戸袋に引き込むスタイルだと後が大変だから小さい窓の方が絶対いい」って。

——自然のエネルギーを無理なく効果的に取り入れるという点で見れば、シンケンの家はまさにパーマカルチャー的だという気がします。

高樹●本当に「あたり前の家」の本には考えられないくらいいい出会いをいただきました。

——太陽エネルギー以外、自然を生かす方法としてはどんなものを考えていますか？

高樹●地球に負荷を与えないという意味では、LPガス仕様の家庭用燃料電池システムを入れる予定です。あと、ミニスによる雑排水の浄化。将来は風力発電もやるつもりです。それと菜園ですよ。二ワトロも飼いたいですね。

——女性の仕事はこれからも続けられるんですよ？

高樹●ええ。どっちも両方楽しもうと思っています。私は地球を100パーセント精一杯楽しみたい、っていうんです。半分は現代の消費社会を楽しんで時にはせいたくもするけれど、あとの半分はパーマカルチャーで地球に返す、と、自分の存在がマイナスにならないようにうまくバランスを取りながら、中道を行う、と決めていています。





高橋沙耶さんの家づくりのプロセスは  
高橋さんのホームページで随時公開される予定だ。  
<http://www.saya.jp/>

# 家も人も、ロングライフ。

LONG 永く住み続ける知恵と

LIFE 楽しく、豊かに生きるための工夫をこらした

BOX 3階建てにも対応する、高性能で頑丈な器



日本のベーシックハウスを考える

# LLB

LLB  
という  
考え方

1

## 日本の住宅は、 なぜこんなに早く 壊されるのでしょうか。

日本の住宅の寿命は約30年と言われます。しかし、実は物理的な耐久性とは何ら関係のないことで壊されることほとんどです。つまり、デザインや使っている建材が時代遅れになってしまった、もしくは家族形態に間取りが合わなくなってきたか、という理由が多いのです。もしも、それを見通した住まいづくり、思想のある家づくりがなされれば、100年でも住み続けられるはずです。まず、居心地のいい場所をつくる事が住みづくりの原点。長い間気に入って住み続けたいと思うこと、そして住みこなせるプランかどうか、が住ま



いの寿命に大きく関係しています。

また、シンケンはサステイナブル(持続可能な)ということこそ、そのまま100年壊れないことは考えません。むしろ、手入れや手当をしながら100年保たせることが、健全な人と住まいの関係だと思っています。そうすること、家への思い入れが生まれ、素材が経年変化で深みを増す過程を楽しむという、さらなる豊かさを手に入れることができるのではないのでしょうか。

## 家も人も、ロングライフ。 自由を後押しする 最適な「箱」でありたい。

時の経過と共に変化する家族形態、ライフスタイルの変化に柔軟に対応するために、建物の構造を強固にしつつ、屋内の壁面をできる限り簡潔にし、屋内の空間構成をテッドスペースなくフルキシブルに考えたい。住みは居心地のいい気の利いた箱(BOX)であればいいと思うのです。必要に応じて3階建の空間にすることもできます。

そして、ロングライフは、もちろん家だけではありません。60代から自由な元気に、子育て、仕事などに追われていた時期の分まで、自分たちらしさを大事に暮らしたいという人が増えていきます。健康に配慮した建材、太陽の力を活かしたソーラーシステム《そよ風》で快適な室内環境をつくり、アクティブでありながらほっとする安らぎのある生活を後押しします。



## 全国に広がるLLB研究会

LLBの住みづくりにも関わった工務店のネットワーク「LLB研究会」が発足。住宅の資産価値の向上や環境への配慮、住まいの楽しさや遊びなど、日本の住宅の「在るべき姿」を追求する組織です。現在、宮崎と山口にはモデルハウスも誕生しています。



● LLB 山口モデルハウス  
SUNSU TOWN - 防府市岸津2丁目12-20  
株式会社 LLB 山口コーポレーション  
山口県防府市開出西町 21-1  
TEL.0835-38-0267 FAX.0835-38-5500  
随時、ご案内しております。  
見学希望の方は、電話にてお申込み下さい。



● LLB 宮崎モデルハウス  
宮崎市吉村町南田甲 1083-1  
TEL.0985-29-6066  
LLB 宮崎【株式会社センダハウス】  
宮崎市小松 1173-22  
TEL.0985-62-4568 FAX.0985-62-4569

<http://www.llb-style.co.jp/>

木材と金物

精度の高い木質軸組パネル工法と  
強くて安全な鋳鉄金物。

家は見えない部分こそ、  
肝心です。



LLB  
という  
考え方

2

## 寸法精度が高く、強度や耐久性の高い構造材の骨組みです。

LLBの家の構造材には、集成材角材とモイス（154ページ参照）および構造用合板のパネルを使います。集成材とは十分に乾燥した板を張り合わせ、反りやねじれ、割れが少なく、間伐材や小径木を活用でき、大きさを自由につくることができるといった利点があります。合板は、板を繊維方向を1枚ずつ直交するように重ね接合してつくるもの。これも反りやゆがみが生じ

にくく、方向性によって性質や強度が異なるという木材の欠点を緩和し、広い面積を強固につくることができます。

材料は工場で一括管理して加工するので、寸法精度が高く、強度や耐久性の一定した品質を確保できます。これをフレーマーというシンケンならではの職能集団が木質軸組パネル工法でくみ上げ、家の骨組みをつくります。

## 骨組みをきっちりつなぐのが、ダグタイル鋳物金具です。

LLBの骨組みをきっちりつなぐのが、ダグタイル鋳物でつくる金物で

す。従来の鉄のものにくらべ湿気に強く錆びにくい鋳鉄なので、ふつうの鉄より強度があり、振動や衝撃にも耐性が高いという特性があります。日本ではマンホールの蓋、新幹線のレールと枕木の接合部、阪神大震災以降のガス管や水道管に使われています。

この金物は棒状ではなく円盤状になっていて、面で荷重を受け止めます。また、金物には「引き寄せ機能」がありますが、これは宮大工が寺社仏閣で使う「くさび」をヒントにしています。一つ一つが製造番号を持ち、品質に責任をもつて供給されている金物です。



セントリコン<sup>TM</sup>・システム

薬を撒かず、シロアリを  
巣ごと根絶。安全性が評価され、

学校や博物館などの公共施設でも  
採用されている防蟻システムです。

LLB  
という  
考え方

3

株式会社ハウスケア  
〒890-0056 鹿児島市下荒田4丁目49-23  
TEL.099-812-8348 FAX.099-812-8358  
ホームページ <http://www.house-care.co.jp>

SLOW LIFE STAGE 132





## 劇薬をつかうシロアリ駆除はしたくありません。

九州南部や沖縄など暖かい地域ではシロアリによる被害がとくに多く、大切な住宅という資産を損なっています。しかも温暖化により、ふつと冬には活動しないシロアリですが、最近では12月になっても活動が見られるようです。言い換えれば、温暖化の進行により、日本全土の問題になっていく可能性もあります。コンクリートのつなぎ目や配管まわりに入り込み、コンクリートをかじり、内側の木部にまでいたることもあり、鉄筋コンクリートの建物でも安心はできません。また床下に炭を敷いている場合でも、シロアリは活動します。

シロアリを防ぐ方法として、一般的にはシロアリ駆除剤という劇薬が使わ

れています。しかし、「住まい手の健康に好ましくないものは使用したくない」と考えるシンケンには、セントリコン・システムを採用しています。

## 最低限の薬剤で、直接触れない方法だから、安心です。

シロアリは新たな餌場を見つけると、フェロモンによりそこに仲間を誘導する習性があります。セントリコン・システムはこの生態を利用したもので、家の周囲に餌場（ステーション）を仕掛け、通常はシロアリが好むアスペンという木を入れておきます。この木にシロアリがついていないか、スタッフは通常異冬をのぞいて年間10回、訪問し点検します。もしこのステーションにシロアリの存在を確認したら、ここで初めて調整した薬剤を使用し、シロアリに直接薬剤を

摂取させます。これは繰り返しシロアリの脱皮を阻害する薬剤で、シロアリはこの薬剤を巣に持って帰るため、巣中の女王アリも含めたコロニー全体を壊滅させる根本的な防除法です。コロニーを壊滅させた後は、残った薬剤は回収します。人やペットが薬剤に直接触れない新手法で、薬剤使用量もごくわずかです。

この安全性が評価され、セントリコン・システムは幼稚園や学校、また文化財や美術品の収蔵されている博物館などに採用されています。シンケンでは、ハウスケアという関連会社を設立。県内でこのシステムを展開しています。ハウスケアスタッフは、各地域に配置され、常に勉強会を開き、より安全で有効なシロアリ壊滅方法について学んでいます。

土壁のように呼吸する  
多機能ボード「モイス」

美しい間仕切りとして、

シンケンの住まいに使用されている

「モイス」は、マルチな機能を持つ、  
理想的な建材だと思っています。

三菱商事建材  
塩地博文さん

LLB  
という方  
考え方

4



「けい酸カルシウム板」通称けいカル板は、昭和30年代の建築ラッシュに生まれ、内装間仕切りのボードとして重宝に使われていた建材だ。15年ほど前に、健康問題により脱アスベスト製品に生まれ変わったが、以前のけいカル板が持っていた粘り、粘る、曲がるという性能が再現できずにいた。

2002年に三菱商事建材が発売を開始した「モイス」は、アフリカで産出する粘土鉱物の一種「バーミキュライト」を主原料に、国産の珪砂、消石灰、パルプ繊維を混入して、高温水蒸気下養生（オートクレーブ）し、接着剤を使わずに成形したボード。吸着性、吸放湿性があり、粘り強く曲がる性質で加工に向き、不燃性、耐力も持ち合わせるという多機能ボードだ。



上・モイスで仕上げた壁面はマットで白く、涼風のような雰囲気がある。  
下・アフリカ産の主バーミキュライト。右はそれを細かくしたものだ。

「つまり健康障害もなく、かつての製品が持っていた多機能パフォーマンスを再現したのが、この「モイス」と言えるでしょう」と三菱商事建材モイス事業部の塩地博文さんは話す。

調べてみると、モイスは空気中の湿度が70パーセント以上だと吸湿し、40パーセント以下だと放湿しています。土壁のような自然な吸放湿性があるんですね。

そのまま室内にあらわして使える仕上げ材でもあり、その場合は吸放湿性をフルに発揮し、保温性を備え結露も防ぐ。揮発性有機化合物（VOC）を吸着・分解する機能も持つ。

「ですからシンケンさんのような、覆わない、仕上げとしての使いかたがいろいろいいんです」



「この建材のマルチさは、床、内外装の壁、天井とあらゆるところへの施工を可能にします。つまり家を構成する部品の数を減らすことができる。いま住宅が壊された時に出る廃棄物で問題なのは、分別が難しいということ。部品が少なければ分別はしやすくなります。またこのモイスは使用後は土に戻すことができ、肥料として使用することもできます」

その機能が注目を集め、売り上げが予想以上に伸びているため、量産効果も価格に反映されはじめているという。白い色調とマットな質感は漆喰を思わせる。なるべく環境や健康に配慮した建材、しかも美しいものを使いたいというシンケンにとって、理想的な建材だと言えるだろう。

温熱環境を心地よくコントロールする  
ソーラーシステム《そよ風》

LLB  
という  
考え方

5

家中を良い温熱環境にすることが、  
人間が健康で長く生きるために  
大事なことです。

環境創機  
友伸平さん

とも・しんべい

1935年、熊本県生まれ。外資系大手石油会社で、清家清氏指導のもと灯油セントラルヒーティングの普及に従事。68年、オーストラリア・バルカン社にて、床下に温風を通す暖房システム等を研修。78年、金属加工等の三八工業株式会社へ。1986～87年、奥村昭雄氏考案のOMソーラーシステムの中心機材・ハンドリングボックスを開発。1992年、トモス株式会社設立。今日まで約1万7000棟にソーラーシステムを送り出す。次世代ソーラーシステム《そよ風》を開発し、環境創機株式会社を設立し販売を開始する。



上・奥村昭雄さんデザインベンチに座る友さん。実はこの自宅も奥村さんの設計によるもの。

下・猫のコレクションが家のいたるところに見られる。



## 暖房システムを 考えつづけて

シンケンが家づくりのなかで、ずっと取り組んでいるパッシブソーラーシステム。それは、機械的な手法に依存しすぎることなく、昼間の太陽熱や夜間の放射冷却など自然のしくみをうまく取り込み、住宅のなかの温熱環境を心地よくコントロールする方法だ。現在、シンケンの家に採用されているのは、ソーラーシステム《そよ風》。

開発者の友伸平さんは、若いころ外資系の会社で一般住宅のセントラルヒーティングの技術営業を経験し、その会社の技術顧問だった建築家・清家清さんからセントラルヒーティングとは何かを教わった。一貫して戸別暖房システムを考えてきたエンジニアである友さんだが、そのうち自分でシステムをつく

つてみたいと思うようになり、町工場へ移り、まず東京ガス、日立、東芝など大手メーカーと暖房機材の開発をした。

そして新たに暖房をつくりたいと考え、『暖房づくりハンドブック』の著者である建築家・奥村昭雄氏を訪ねた。奥村さんは友さんの語る町工場の薄い鉄板の加工技術にたいへん興味を示し、吉村順三設計事務所まで設計して欲しいと愛知県立芸術大学の視聴覚教室天井のルーバーの製作を友さんに依頼したそうだ。それをきっかけとして、友さんは奥村さんとさまざまな建築の場面で共同作業をするようになった。

そんななかで、空気を集熱して暖房に利用するというシステムを考え出した奥村さんと、その装置を形にした友さんとのコンビが生み出したのが、後に全国的にその名を知られるようになったOMソーラーシステムである。

## 《そよ風》で 温熱環境を平準化する

《そよ風》は、屋根下で暖められ棟へ上がってくる空気を、屋根上に設置した箱に集める。そして暖められた空気を、不要なときは外へ逃がし、必要なときだけ屋内へ取り入れる。取込ダクトに設けたリターン口と取込ファンを経て、取り入れた空気を床下へ導くシンプルな仕組みだ。12センチ角のコンパクトな制御盤が棟温・室温・外気温を感知して、季節に応じた温熱環境をコントロールする。《そよ風》は、家の大きさに応じ、機材・部材の組み合わせが選べるので合理的で経済的。部材がシンプルなため施工もシンプルだ。

大きな特徴は、夏の日中の熱い空気を屋根上で排気して屋内が暑くなるのを防ぎ、屋内の冷房装置がなくなり、冷気や夜間の放射冷却を効果的に利用すること。《そよ風》には、夏を涼くするのために、OMソーラーシステムにはなかった工夫がされている。

また、《そよ風》は、家の大きさに応じた機材・部材の組み合わせが選べるので合理的で経済的でもある。屋内に設置する部材はほとんどダクトだけとコンパクトなので、小屋裏が部屋として活用できることも、住み手にはうれしい。そして、住み手でもできるほどメンテナンスが容易であることも重要な要素だと、友さんは言う。その《そよ風》を誰にでも自由に使えるものとして販

売するのが、友さんが立ち上げた環境創機だ。

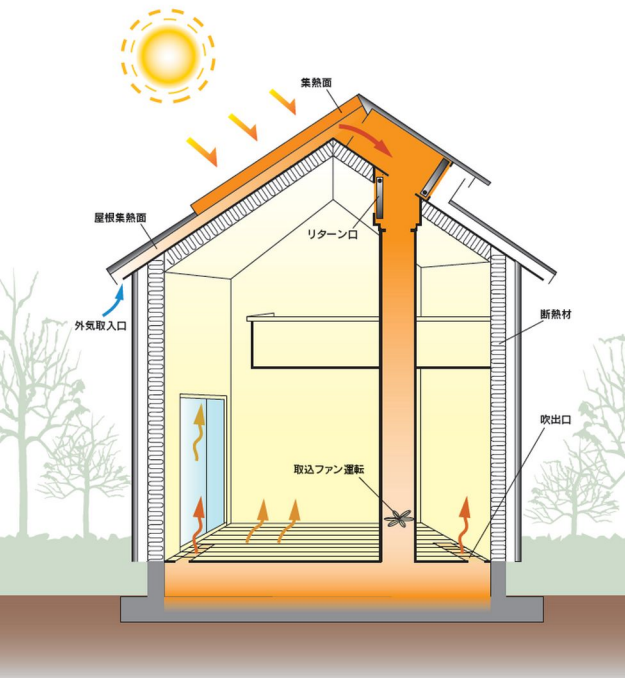
「温熱環境がよくないと、健康で長生きすることは難しいと思います。夏と冬、昼と夜の室内温度の急激な変化が高齢者にとって負担である」と一般的に言われていますね。《そよ風》により、その温度差が平準化されるんです。また、一日中ゆっくり空気が動き、わずかずつ換気が行われ、新鮮な外気がゆっくり取り込まれるので、高齢者だけでなく誰にとっても良い温熱環境をつくるのができると思います。」

誰にも良い温熱環境をつくること。エンジニアとしてこのことに打ち込んできた友さんは、いま《そよ風》を普及させることを、自分の使命だと思っている。



上・何事も実証主義の友さんは、自宅のソーラーシステムでデータを探っていた。小屋裏のスペースは実験室のようだ。  
下・その小屋裏にOMソーラーシステム1号機のハンドリングボックスがあった。



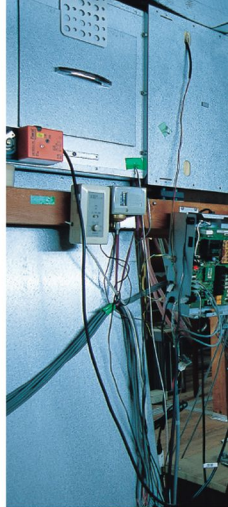


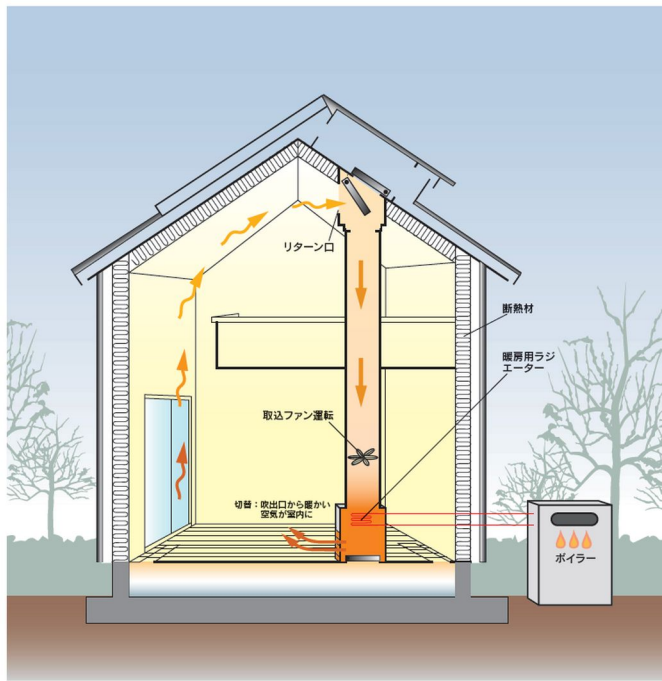
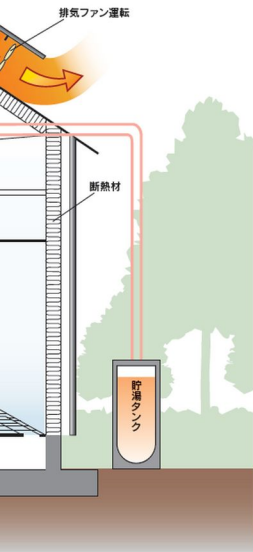
# 1 冬の昼

軒先から入ってきた空気は、屋根や集熱面で暖められ自動的にファンで床下へ送り込み、基礎のコンクリートを時間をかけてゆっくりと暖めて蓄熱する。床下の温風は床下面に広がり、やがて吹出口から室内に入る。室内に出てきたその空気は、さらに家中に広がり、床表面と家全体を暖めていく。

太陽の熱、夜の放射冷却など自然の力をうまく利用し、最低限度の動力だけを使って室内の温度環境を平準化する。ファンの稼働にかかる電力はわずか電球1個程度。またお湯探りで温水をつくり出すこともでき、エネルギーを有効に使うことができる。

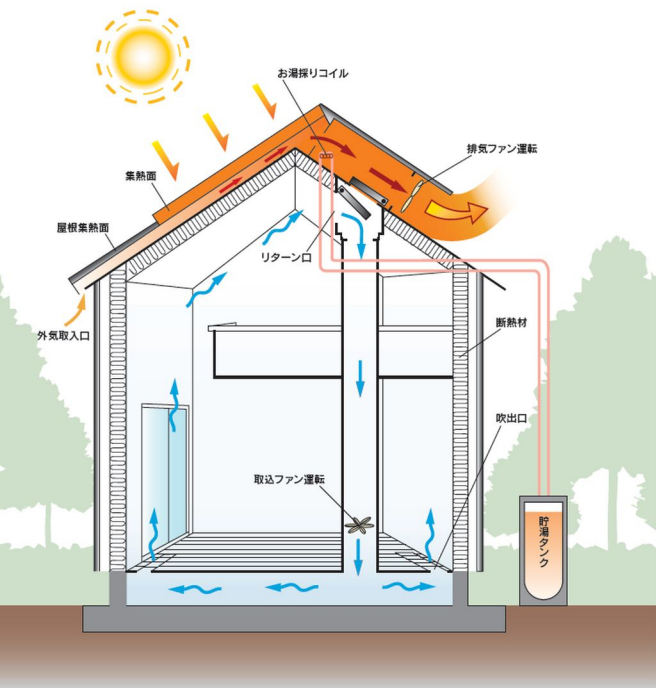
## ソーラーシステム《そよ風》のシステム





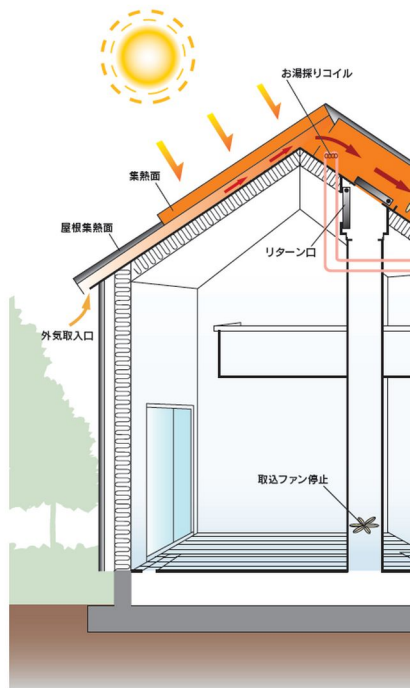
## 2 冬の夜 補助暖房機能付 床上で送風

日射がない時や寒いときは、温水利用の暖房用ラジエーターを備えた切替吹出口を使い、すぐに暖まるように、直接室内に温風を吹き出すことができる。温風を床下に送ることも可能。それと同時に循環機能が働いて、暖かい空気が室内を巡り、家全体に広がっていく。



## 4 夏の昼 (排熱と冷房室内循環)

排熱だけで暑いときは、補助的にエアコンの冷房を入れる。制御盤の循環ボタンを押すとファンが動き、天井下の空気がリターン口より床下へ送られ、同時に1階の冷えた空気が屋根裏まで上がって循環し、涼しさを家中に広げることができる。



## 3 夏の昼 (排熱)

夏の日射で熱くなった屋根の空気は、北側の屋根の上で排気される。また、その熱い空気を利用して、お湯採り（水を屋根上の熱い空気の中にあるコイルに通して温水にし、お風呂などで利用すること）もできる。

シンケンのモデルハウスに  
来てみてください。

冬は暖かく、夏は涼しい。  
庭をわたる風はすがすがしい。  
お客様に五感で  
感じていただきたい快適さです。







営業時間／10:00～17:00 (お正月、お盆休みをのぞく)  
鹿兒島市与次郎2丁目KTS住宅フェア内  
TEL. 099-253-6888

駐車場があります



シンケン家の完成見学会にもご参加いただけます。  
日程など詳しいことは、下記、  
シンケンのホームページでご覧いただくか、  
お電話にてお問い合わせください。

ホームページ <http://www.sinkenstyle.co.jp>  
TEL. 099-286-0088

## 窓

を開け放ち、水を汲んで「打ち水」する。長野博子さんの朝の仕事の始まりだ。オーブンの10時を待ちかねているお客様には、早めにドアを開ける。板土間に立ったまま、あたりを眺めているのは初めてのお客様だろうか。長野さんはそこを声をかけてみる。「建つて何年経ちますか？」の質問に長野さんらが半年ですと答えると、お客様は「ああ、そつですか、木の香りがしますねえ」とじつじり。お客様が家の中をひとまわりざれたらお出ししようと、長野さんはお茶を淹れる。鹿兒島市与次郎ヶ浜のKTS住宅フェアのなかにある、シンケンの「杉の家」のモデルハウス。夏の暑い日に訪れ

## 長野博子

でも、室内に入るとすつと涼しい。「冬はね、雪の日でもスリッパがいらぬほど暖かいですよ」と長野さん。

もう家が完成してから数年経つのに、「近くまで来たので」といまだに顔を見せられるお客様がいるという。初めてここに来た頃は、長野さんの顔を見るとはーと走って抱きついていった子どもさんも、ずいぶん大きくなったのだそう。今日は、あるお施主さんと営業担当者の打ち合わせがある予定。長野さんは手づくりのお菓子を用意して待っている。彩りの美しいお菓子は人気だと聞いた。

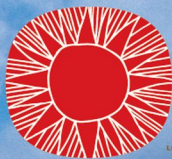
「窓から見える庭が、絵がきのようでしょう？ 春は新芽が出始めると早

いですよ。春はあつという間にもやってくるんです。ここで気づくことって多いですよ」

何度か訪れているお客様には「畳に座つてゆつくりされませんか」とお茶を出す。その合間には「ごまめに掃除。化学そうきんはあまり使いたくないから、固くしほつた布で杉板を拭く。

なんとなく落ち着くのは、そんな長野さんたちのおもてなしの気持ちからなのか、家の持つびのびした雰囲気なのか。おらかな吹き抜けの心地よさ、板土間の懐かしさ。訪ねた人は、無駄なものはないのいろいろなものがあるような、そんな住まいの豊かさをきつと五感で感じられるだろう。

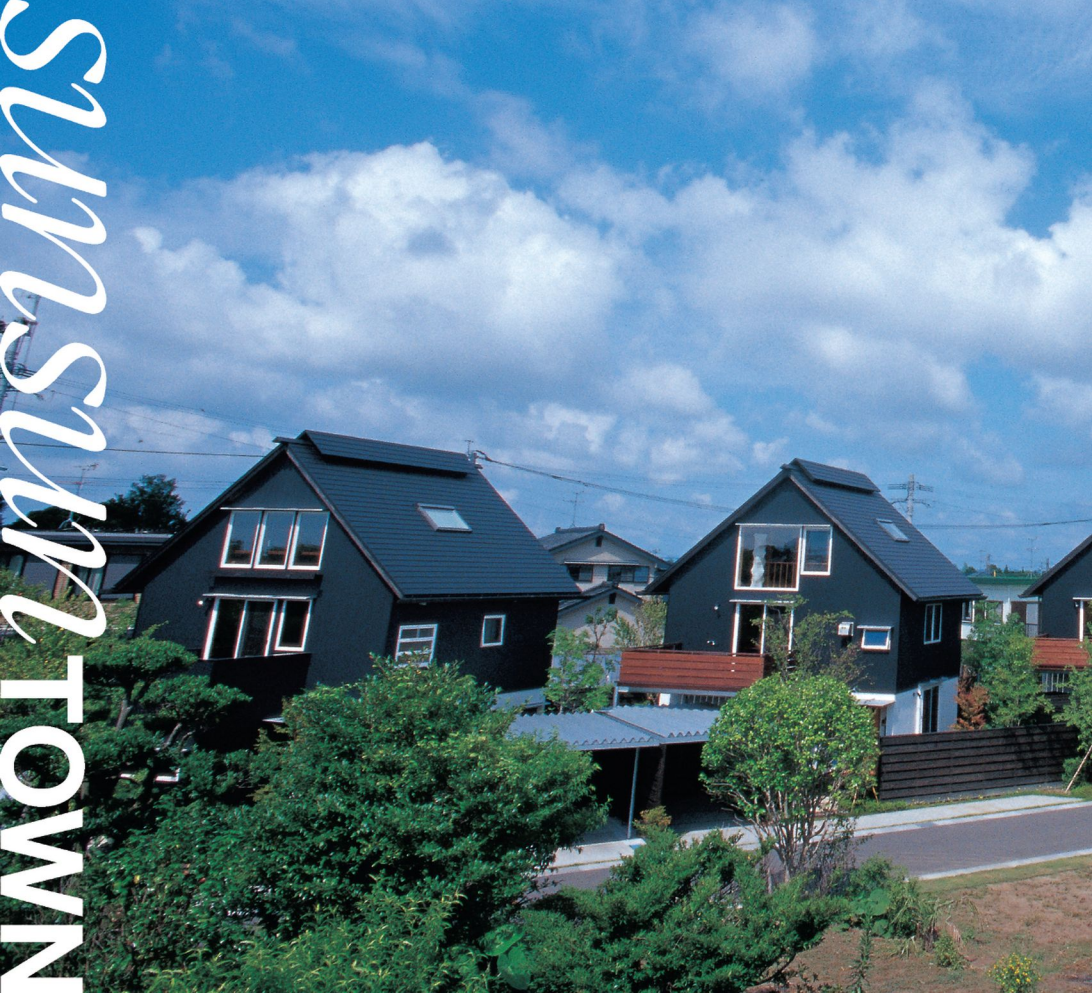
# シンケンの提案する あたらしい不動産のかたち



LLJ  
LONG LIFE BOX

*SUN SUN*  
TOWN





SUNSHINE TOWN

シンケンはお客様の住まいづくりにあたり、土地さがしのお手伝いをしてきました。  
その経験を生かし、まとまった上質な宅地を開発し、シンケンの家が立ち並び、  
緑豊かな美しい街「sunsun TOWN」事業に取り組んでいます。  
独自のコンセプトで、地域や通りの印象をよくするようなユニークで美しい住まいを、  
それぞれの場所に合わせてつくる。そんなシンケンスタイルの家々が  
ひとつの街として立ち並び、「群」となることで、その効果は倍増します。  
豊かな住環境を育て、また資産の運用にも役立つ試みです。





## 住みたい家、住みたい街に暮らす



### **sunsun TOWN 吉野**

鹿児島市吉野町  
2004年12月完成  
計5戸

### **sunsun TOWN 隼人**

鹿児島県霧島市隼人町姫城  
分譲中 (2006年10月現在)  
計3戸

### **sunsun TOWN 始良**

鹿児島県始良郡始良町西餅田  
分譲中 (2006年10月現在)  
計7戸



## 株式会社 シンケン

本社・シンケンスクエア：  
〒890-0056 鹿児島市下荒田4-49-22  
TEL.099-286-0088 FAX.099-259-8088  
URL <http://www.sinkenstyle.co.jp/>

シンケンワークス：  
〒892-0871 鹿児島市吉野町3506  
TEL.099-244-2258 FAX.099-244-3133

モデルハウス：  
〒890-0062 鹿児島市与次郎2丁目KTS住宅フェア内  
TEL.099-253-6888

# 繁 SLOW LIFE STAGE さんさん 繁

SINKEN  
STYLE  
Concept Book

## 繁繁一さんさん

SINKEN STYLE CONCEPT BOOK VOL.3  
2006年11月17日

発行人：迫英徳

発行：株式会社シンケン

執筆・編集協力：長町美和子

編集・部分執筆：豊永郁代（有限会社アイシオール）

写真：北田英治／木浦恵美子（株式会社シンケン）

アートディレクション：春井裕

デザイン：有限会社ペーパー・スタジオ

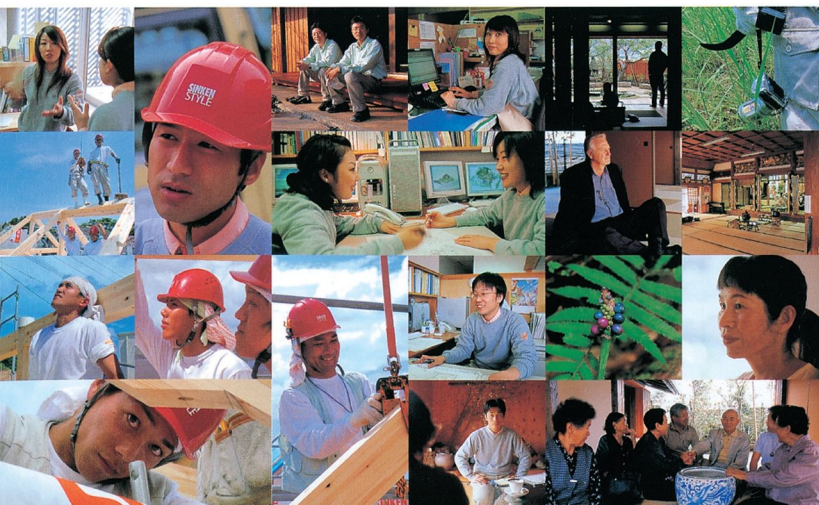
印刷：凸版印刷株式会社

\*無断で本書の全部、または写真を文転載することを禁じます。

©2006 株式会社シンケン

### 掲載協力

\*本書を制作するにあたり、以下の方々に協力いただきました。  
河本敏夫様・桂子様、大久保三郎様・奈利様、中澤良次郎様・桂子様、坂ノ上敏孝様・イツ子様、白黒龍仁様・景子様、西俊寛様・豊子様、鶴田松雄様・信子様、鶴田幸伸様・由紀様、穂園幸郎様・律子様、天野富道様・隆美様、平島忠久様・幸子様、ひらしまクリニック様、高樹沙耶様、塩地博文様、友伸平様、武隈晃様・順子様、手塚博愛様・美智代様





ISBN4-9900793-2-9

C0052 ¥1429E



SLOW LIFE STAGE

黎黎さんさん

2006 SINKEN Concept Book 03

発売:

株式会社シンケン

〒890-0056

鹿児島市下荒田4-49-22

TEL.099-286-0088

FAX.099-259-8088

<http://www.sinkenstyle.co.jp/>

頒布価格: 1,500円(税込み)

SINKEN  
SINKEN CULTIV

